茶乃書

多9
674
416

茶陽書

門 ヲ 9
藏
巻

宮城県立図書館

目録

一炭手前の事
但し四畳半点目隅炉向切る事
一風炉炭手前の事
附 風炉事し杯
一風炉手前の事
一初座濃茶手前の事
一後座濃茶手前の事
一茶器出し杯る事
一点前後手前の事
一棚かざり初座心得る事
但し器物
一後座濃茶手前の事
一薄茶手前の事
一風炉ゟ濃茶迄水を
入れる迄細し事
但し出し風炉事杯

一棚もの之事矩之事
一廻り炭の事
一長緒茶入之事
一和巾つゝみ茶入之事
一回棗之事
一袋入棗之事
一茶巾かけ之事
一こつみ手ぬぐい之事
一黒次き之事
一重ね茶碗之事
一炉の灰并五徳据方之事
一風炉の灰并五徳据方之事
一囲炉裏炭之事并寸法
一風炉炭の事　六月
一炉ふち拭板の事
一炉壇ふき板之事
一五徳掃板之事
一風炉ふき板之事
一回ふき板之事
一小板ふき板之事

一釜よりこのしらいのこと
附自在くさりの事
一鐶之事
一炭斗之事
一釜敷之事
一火箸之事
一香合之事
一三ツ羽之事
一一ツ羽之事
一灰かゝろくはの事
一水次之事
一ふ巾の事
一手燭之事
一和巾之事
一水さしの事
一茶入之事
一棗并中次之事
一茶碗之事
一替茶碗之事
一茶筅之事

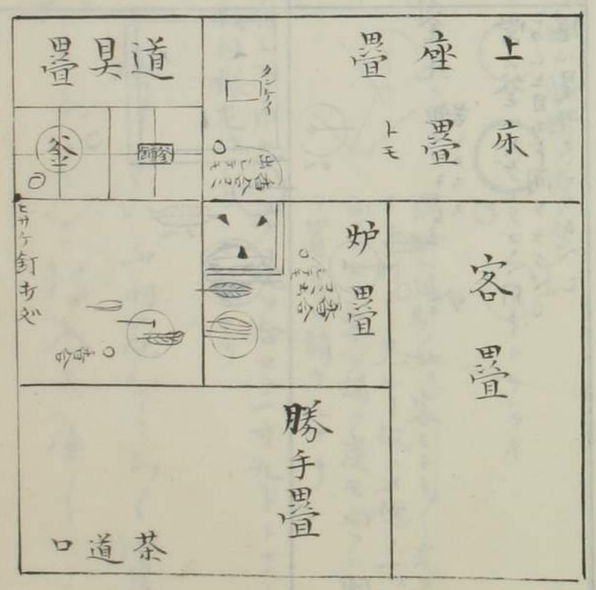
一茶杓の事
所荘り板之事
一茶巾の事
一柄杓の事
一蓋置之事
一茶碗之事
一呑板の事
一手前を替る事

炭手前之事

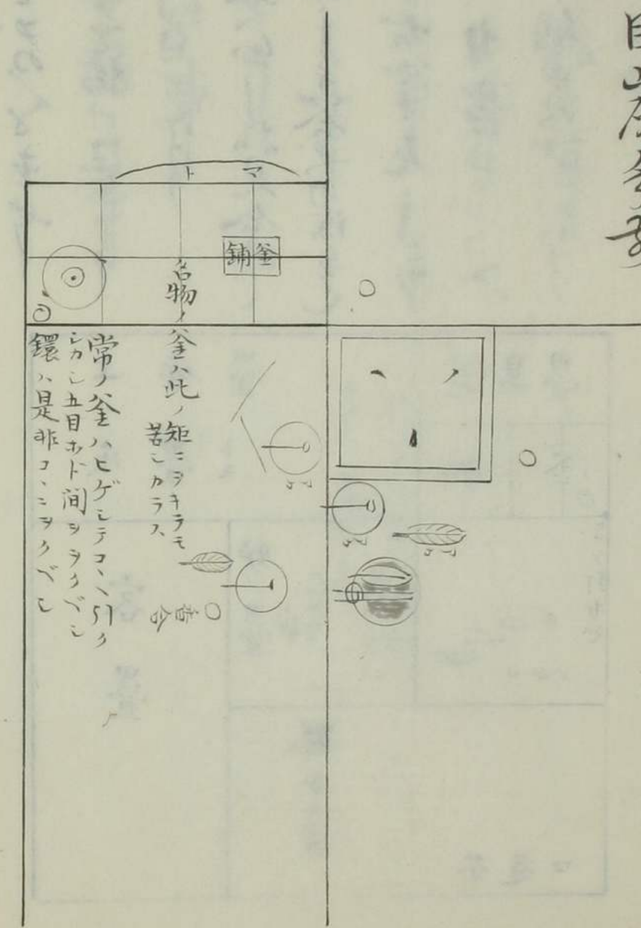
四畳半

畳ハ京間六尺三寸九分

一初め釜おこを出せ
炭を釜を揚げ法のこと
釜を二付ろなり
一香合客へ出し拝見合せし
何も縁より香合文け除き
一三ツ切い右ゝ左ゝ
炉の方へ炭斗より入
重ね炭ゝ

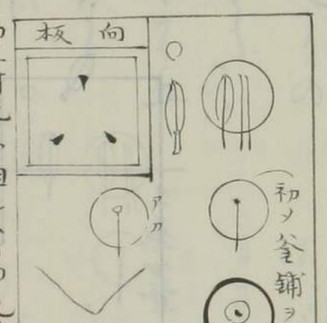


臺目炭手前



隅炉炭手前

一 炭かゝるくさ、
ちゝ下火をつくろ
ひ後まき初め
かりかけ世一変、
下け釜をふるを元
湯のみ〻を見蓋を
まるお釜暫くほとを見下さる
湯をそ釜をとり一角を加
ふるくさ炭を入る屋

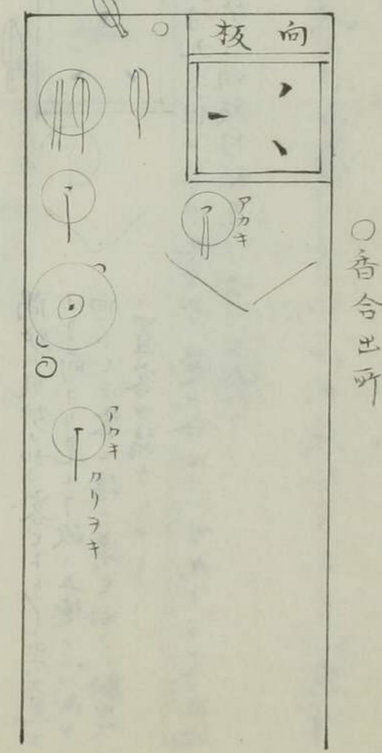


中一寸九分但シ〻り巾九分立ノ是ヲ合セテ一寸九トトナルノ心也
隅炉ニ向板ハ様左リノ方ニモ入ルナリ

隅炉ハ爪炉ノ如ク客ヒトリ〻炭ヲ見ヨリ前ヨリ見ルヿ故ニ五徳ノ一ツ爪ヲ向フニシテ客ヲ請ケ炭モ向フニ胴炭ヲ置客ヲ請ケルナリ

向切炉炭手前

、三ッ切を隅かけて
まゝあり其時に隅
を切ぬとも尤も
お後に常のごと
又始終竪よ長い
勿論なり



○香合出所

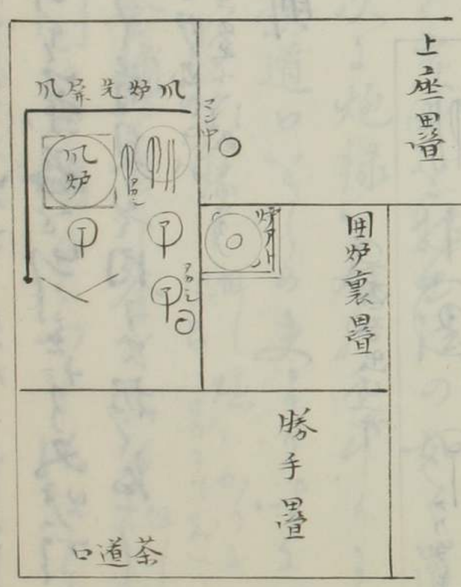
風炉炭手前

、小板の置様い左りの
横目いの目五めまゝい
七め向ふ屏風のり五
寸又い四寸五分なり

、風炉直ー様
（図）
風炉の寸法
なりと云ふ
なり小板い直ー置ー

、風炉炭夜會なりれい短檠手燭の定所なり

、風炉之屏風いふり之ゝ窓ゝれい
屏風なかゝ（ゝ）ゝ去女中なゝい勝の
けこび遠慮ゝ（ゝ）ゝけれい行り風炉
よそ（ゝ）きなり

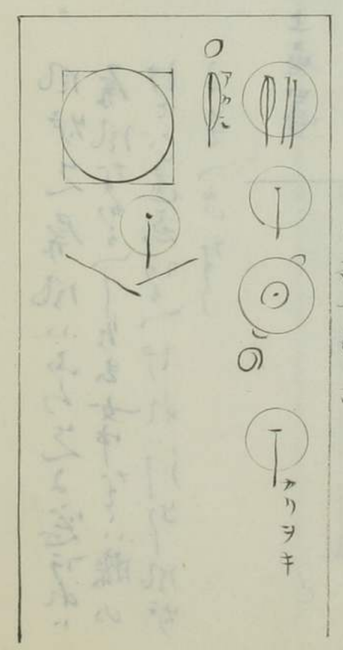


一釜の汚穢炉汚ある時は炉のまくを清潔
なる雲故に釜にかきらを茶器を出すなる又炉のなき
時は畳目のあの男のまくを道具を内へ扱く
炉のまくを釜を置りは釜中のを炉ぬさきに
よりまして釜と釜と毒毒しぬさきのとふ清めものなり

畳目炭手前

一風炉の畳紙あるとのを

一悪して風炉あるいかなる事
なるかなり先炉に清釜
一釜暫ばとをかさるべきをを云
炭一点を請ふとき炭なるるの
定法に釜を清めを



初座 炭手前之事

一客席入して賓主挨拶もして後主煙草盆
煙草を覆ひ見て一点炭投をきをを云し後手
を入和巾を腰に付く炭斗を持出法の如く置き
但風炉なれば炭なるあるの次に炮縁を右手斗にて
持出かりおきして茶道口をしめまより置
但風炉は別なる炭 但炉は別なる炭
次に三つ脇を出 但風呂は別なる炭
次に釜を鐶を掛け釜鋪を出釜をあ炉 但風呂は釜の
大小ある心得あり 法にて
置き 但風炉は炭斗のあ炉縁に三つ脇を元炉縁

炉壇まで掃く客疑まで煙管にて下火に
板子炭を一覽せり（但風炉に下火を客に
一覽せしめ近くまで）
こまい炉を掃たる三つ脚を取除き香合を出
し法のごとく置火箸を元下に置（但風炉に
下火を出
たる火箸を出さたゝうつし
改め体之炭をうつかるべし）其火箸を炭斗
に入れ
しまい置に取除き庭に掃き三つ脚を元のごとく炉縁に
掃き偶に煙壇まで灰のかゝりたるを掃き
度ばかりを掃き夫より白炭を手にて取かろ
くに入れ但初め下火をつくろいかろくを本
に戻し但初めたる時白炭をつゝ第一

炭をうつし炉に方に火箸を右に元
通に移膳の改め体之胴炭を右に手にて法の
ごとく置き右に手の先き炭をよきに
ほど扶の中にそのひよをまいれをぬ夫
より炭を右に持て割炭相手焙炭枝炭と
置く白炭を火箸にて炭斗に元来のごとく火
をつゝして持法に如ク出次に點炭を切の所へ
但風炉に炭をつくろいかろくを閉て
火間をきりて左をつくろいを縁なるうつを元に戻し
三つ脚を元に炉縁炉壇五徳まで掃き
炉と炭とうつの間に元に戻合うして多を

たき香合を蓋をとる時客より一見いたす段
といえば客出る（但客すりたいとい炭斗へ入る釜）
夫より釜をもりひ和巾さばき湯を多少と
見て蓋とる（但隅炉ハ釜のふち浅き故一見いたす時ふ釜をいたしく日置ひさぐ口炭
けかうろくの中法論ハ付重環をまつ取ハ客ハ炭ハ環をかかうろくをれ勝手へ
入第五口をとめ客の目うつるくを見除と待つ取ハ風炉ハ以時客法のうろくを
ふ巾より合せ打出（但炭灰の後打ちうろくを）打勝手へ入次ハ蓋を
次をとり下ハ時蓋を重ふ巾をとり釜を
蓋をとり下ハ重ハの世ふ巾を水次の口ハ拭く
釜くみをとり水次を下ハおき ふ巾をとて釜を肩

胴なりの火氣のとりたれ露をとめふき留し
夫より炉をもりひ五徳の爪をふき（但鉄ハ心ハ）
ふ巾を重み改め中のうろくを載せふ三重を
中のうろく掛く打入り出て釜を環をとり
釜をかけおき之釜敷を敷て釜のひづを
を重して後環をはたき火箸ふけ炭斗を打入
れ（但夜ハなれい敷を客ハ手燭を目掛ハ客ハ炭ハ）客ハ以
間ハ香合を見て想をなり三ツ物をとり
法のうろく掃なりふ入ハ出て和巾を茶巾を
うろく炉縁をふき和巾をみ改めく釜を蓋

を掃らひ熟と切り重ね（但風炉ハ炭ヲ小板ニ）
ふき蓋を掃ふ（ハ）
左様ふ心かず（ハ）客ハ香合を見終て直に
けれハ是を立て客ハ香合の拵物
ハ直ハ湯を注時分ハ相伴客の間稼を見
つくらひ注湯を進（ハ）中ハ（ハ）茶を
ロをしめ稼を入會席の出ハ教訓抄を見て
心得事（但風炉ハ前ヨリ会席ヲ出シ炭ヲ置前ヨリ中起の拵物ニ成ル）

茶碗事

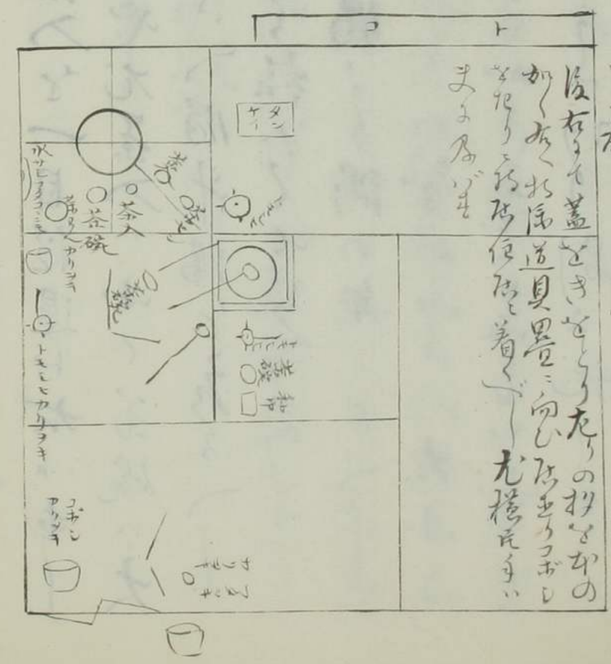
四畳半

一初め水指を大矩に荘り水を真に茶入を三
目除き荘り重なり

一茶碗拵ハ重ね茶入を一目程退け右に重ね
茶碗を先に茶合を中に茶入ハ小く茶碗ハ大
なるにより茶碗の方ハ（脇斗場を立て）
ハ茶碗の方であれハ茶杓なくてハ
一汁三菜の亜相ハ炉の隅より隅の矩に重ね
茶の湯より除き水ハ釜の方に大小ハ
茶の湯ハ尤大小ハかき蓋重を出し
茶碗大なるハ別に重ね別に記す
一柄杓の掛上ハ釜の方に

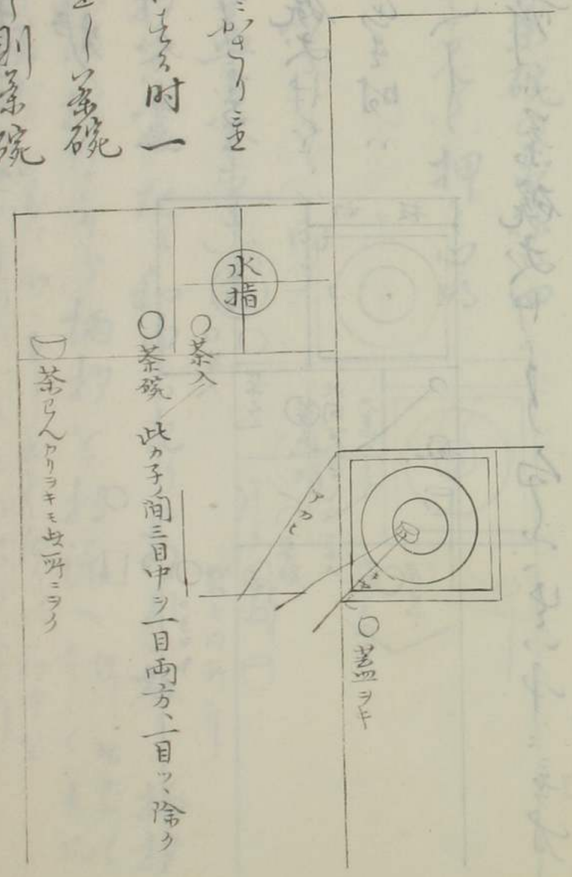
一居住居ハ炉縁の前
左りの隅まもるべ
一茶入茶碗の中へ
水をしかけ真ん
炉隅を上ゲ通りを出す
一茶ろんの出ない直中へ
出し置き
丈けを傾くまま小矩の
真ん中へ入る又真中へ
出すをしといへり

一扨蓋を扨席へ入扨と左りへ蓋を
と置れ如く我前へ引きし右手を
と元へ戻すようにし茶碗をしめて
後右手へ蓋をきせ左りの扨を如の
如く水屋へ道具置へ向ひ左手ふくさ
を左り手に持ち後へ着くべし尤稽古すい
まよ及ぶべ



臺目手前

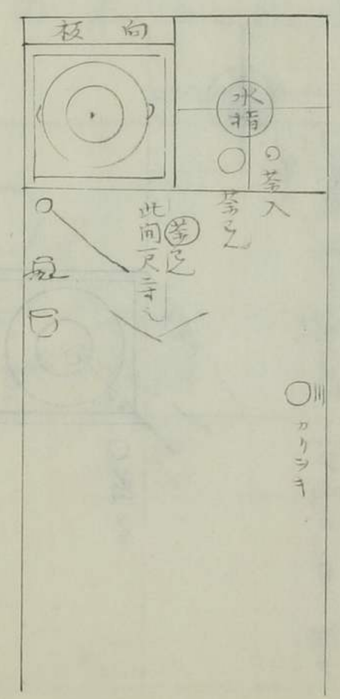
一初メ水指を小矩ヨ莊り
おき茶入を
中の矩水を
の前の見通しに
茶碗を重合せる時一
目除き右手へ茶碗
を組合せ則茶碗
つゝ水指の見通しになるなり



一茶入茶筅の組合ハ初めの茶碗の後茶入茶入の後
ハ茶筅を出す事

隅炉

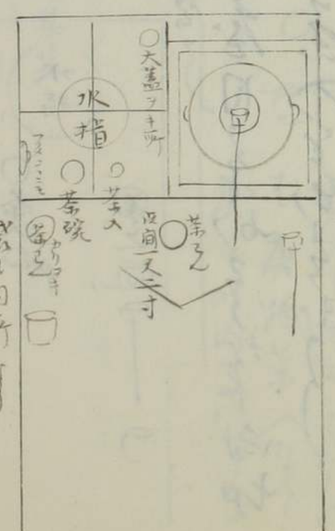
一茶碗客出ル之ハ蓋
ヲトコホし見通シて置
の為ニ茶碗丈けを
除く茶入を出す時ハ
茶入丈けを除く
茶うんの出所ハ茶碗丈け
ニ云り



向切

一水を茶入茶碗の右ハ四
畳半の時ハ向ふ
ニ

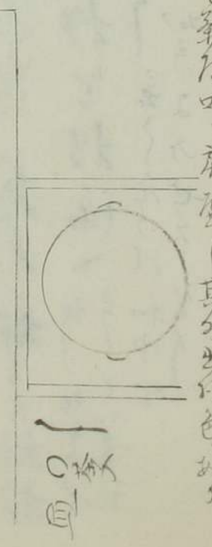
一釜の向ふ大ふなるハ向う
の隅ニ而蓋を出す
出し柄杓茶形をふきたる和巾
を元ニ戻ス和巾ハ柄杓
しかし右ニて蓋ふきを用ひ而
右ニて元ニ戻り釜ふきを元ニ



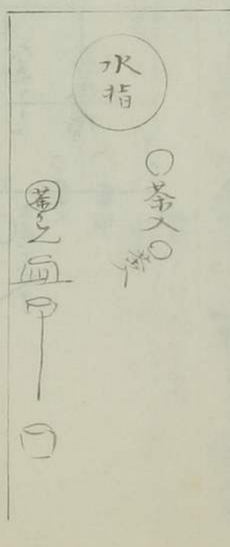
柄杓ハ
但茶碗
らくハ書記
和巾を
なり

茶器出し様之図

一客より茶器一見を請ふときは
まづ茶碗を出し茶筅を
の陰に付、長せおせいたしのあり
所、蓋おきを出し柄杓を掛
茶一杓より茶入を取
ふま改め出すなり此時左後
一茶器出し様之図

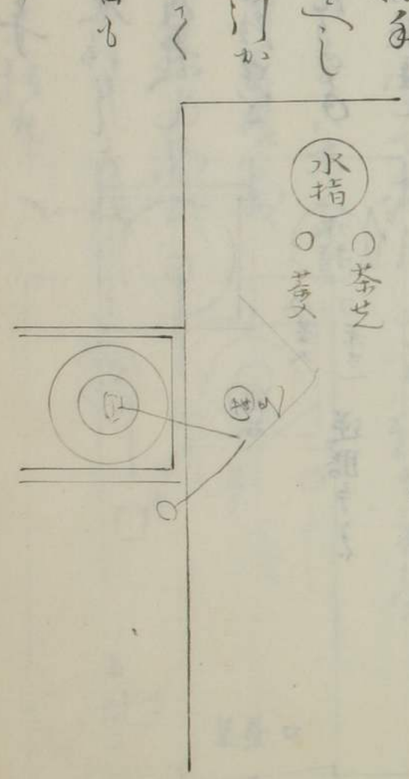


茶器の並べ方茶入茶杓袋を出し
て茶碗口、底底一見すべき出色なり



隅炉
畳目
向切
茶入を出すなり

一茶器の出し様



四畳半点前
蓋おきを鍵を出し
柄杓を引き
それ、點前のとき
なり
畳目
かなり

此間みな道を
重ねたるなれ
ど唐物茶入
底を付るなり

左り勝手

一左り勝手ハ出入ハ定法なし但し便宜なるを考ふべし

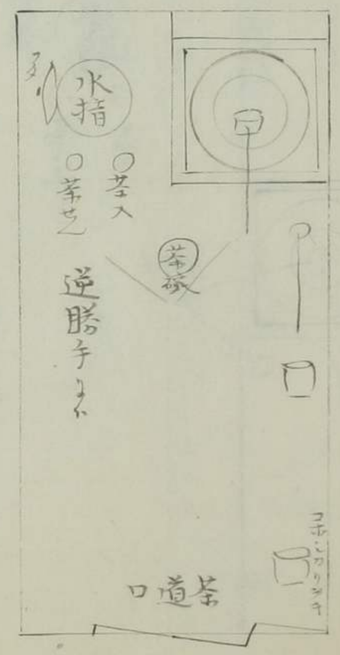
一初め柄杓を持て茶巾口をあけ席へ入き炉に向ひの手を懸を客の所に假置

茶巾口をしめて後定法通ふべし

一柄杓ハ風炉の中ハ唯主柄杓のみなり

一茶碗ハ初め湯をあける時茶巾を持なから懸へ

あけ其手を切ふ〻まゝ



あけ口ハ右なるべし

茶巾を畳を切り常のごとく二重に後水を

いまゝ時ハ茶巾持添て水をあけ畳を

まゝ〻まゝ左りの手茶碗を持右なる茶巾を

右の口ハ畳をきる

一右の蓋ハ左の方へ置

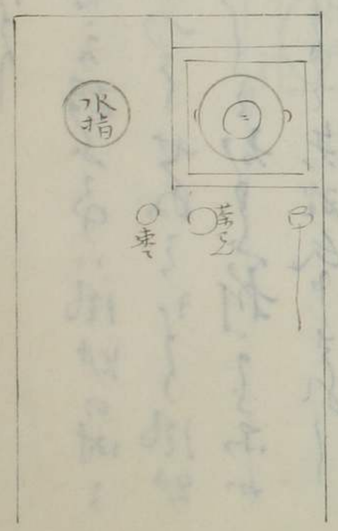
一左り勝手薄茶のときハ未だ

茶筅茶杓合の前茶碗を置

茶なのゝ茶を点る場の

ごとく左りの手ハ元勝手

の時ハ茶碗を右へ持



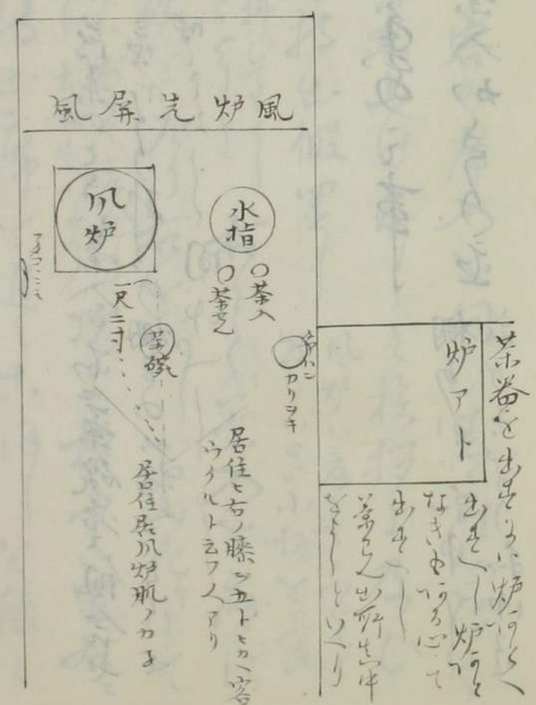
稽古方にて要を特退くなり

一右にて要を多分、門付立掛ふるい風炉の時は
かきりたるにて炉の御いかつくせぬにて風炉
のときも詰ぐまり悪くて却て折うるかか
くなるべき為めなるべし矢張気中なり

風炉茶事

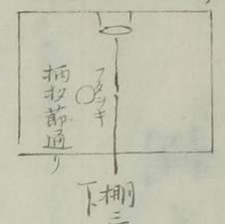
一四畳半荘目荘りは仕覆かけりなり尤四畳半
は扉風を用ゆ付立にて人あり山方中通
りは風炉之扉風を立是も窓あれい立是も窓目い
用の磨り立寸又四寸五寸なり

一水さしは亜所に風
炉まぶと墨にて内
の中ごしに筆に蓋
の立手を環付と水
さしに蓋の立手と
三方を見区に言て尤
水用より高なるい
見る

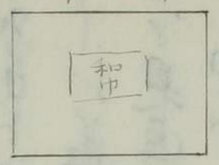


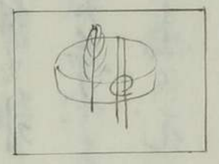
棚荘りの事

後座柄杓蓋ヲトノ処、初座三ツ羽中柱香合



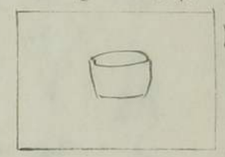
後座和巾の所、初座茶斗



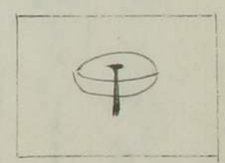


香合三ツ羽の取様に釜を門付きそのえりに三ツ羽香合一緒に元結ぐし

後座ハ炉ノ上ノ所、初座炉ノ内ニ炉縁入



初座



茶のとき茶入の右に茶碗を組合せ棚もの出格をとりて用ゆべし

後座濃茶点前の事

一法はまづ水をもて茶入かきよめ亟

棚あれば和巾なし　茶碗なれば和巾なし

限りを揮候の所かいまれあるべし　客の席入を伺ひ茶座を作り茶點口をこの節は茶上げ

茶碗を出し假置　風炉に茶碗を出すべきなり小板を置

夫より右の茶碗を板出し假置

風炉に茶碗を出すべきなり小板を置

茶碗を腰よりつけ

茶碗を腰より右の茶入を座に

茶入を置合　風炉に茶碗を出すべきなり

次に板を置右

板を用ひて茶碗を拭出し席を進む

ひとしきを出す板を

出す　柄杓を用ひ板出すべきなり

柄杓を用ひ板出すべきなり

右の茶碗を座板なかり座板を

右の茶碗を座板なかり座板を

柄杓を二ツなくて出す　様の如く体之

右て蓋おきを在る事別中を右へ移し
ふ、おきまうけとて位置を定め客へ出
座の接拶よ及ぶ時よ客より花の接拶最の接
拶をなせり

一客と座位を後たりの手より茶碗をとり右に
移し我前よ亞（但し向ふと我との方三寸ほど）右て茶入を元り
茶碗と我との間よおき法の如く帛ひを解き袋
より茶入を出し亡（但し行き時は亞角に風炉に角の路に
さくさくと矢筋式中され）
左りより手を在る亞又和巾をさいきて茶杓を掛け

右て茶筅を出し茶入より右へ寄合せ左りより
和巾を右へとり出し茶巾とりて水をの
蓋前より手を二度拂ひ（但し拂ふ度のなきまふく
きを左へ移茶巾をとりふしをきの方
の上よの七亞（但し風炉に山水の
南この七亞）柄杓をとり揚げ左
りより手へ移をとき右て和巾の角をとりたり
和巾をはなして柄杓をぬきとり左りの膝の上
休之上へ置て三度を又二度より打て釜より
蓋を拂ひ（但し左と拂ひて蓋をおきせざるなり）蓋を元ふ亞の七
和巾を膝さそう左りの杓を右へ移湯を汲み

茶さじ、入柄杓を釜にかけ（但炉風炉のかたちすべしすべし）右の茶筅をとり茶碗に入（但極寒の御中蓋をせん）柄杓をとり左の手に持て蓋をとり茶碗に茶筅を入きく柄杓を右の手に持て茶筅をとり茶柄杓を茶入に掛る也蓋をとり蓋を茶柄杓を茶入に掛けて腰の和巾をとり釜のふちを元湯を汲み茶を點ずなり又寒中のゆへらるゝ方は茶巾をとり茶巾と云ふて方法は記せ之ゆへ茶巾をとれい中蓋いせるなり

をきて茶筅を入るおきたる茶さじを向こと我との

ゆびまくるゆへ茶碗を洗、茶筅をふり

茶碗を右の手に茶巾をとり茶碗を洗ふ両手

にて元陽茶巾の角ゆい孫の所と休処左斗りにて

湯のつけ口に露をきり茶碗を拭ひ（但平茶碗かたり

まるを

右にて茶碗を我前より置なり（是迄序の位なり）

をきて茶巾を右にて元左より蓋をもとの所へ返しをき

さはき改め水をとり元左より蓋の

次に茶柄杓をとり孫のかしらの休処（但七之下る様に

左りに茶入を元来り右に茶柄杓をおなじく蓋を

とりまき茶柄杓を孫に休処おき茶入をおき茶

碗へ臨まんめ後茶柄杓を元来り茶を茶碗へ入

をなり時に客より こくもふ口ゆりと口入れ

下されと柄杓を主人にたぶくもとるべしなを客

こくこと茶入孫をまたり〳〵引き茶柄杓を新

く七之を作り茶碗に掛け置右にて茶入れ
ものを元揚げ左りにて茶入を持出し我家よ
り蓋をもち左りの手にて茶
杓を元左りを茶碗に添居く茶を茶碗になして後
茶杓を持つて左りを添居く茶杓を取（但おもき
呼吸をもつて沸の沒なり）茶杓にきり留めを左りにて
持て茶入へ（但水一杓置き風炉に掛て釜の蓋を元
茶を點ずるなり）ものを撫でくべ湯を汲み之出
ばつりを点ず（但茶を點ずる時は其除に沸たる湯を合て後茶筅
茶碗へ入より茶を點ずる時は茶碗に湯を合て後茶筅
をもつて左りを茶碗に添茶をよくほどき茶筅を

茶碗の左りにうるほしまい左りの手にて
茶の外へ出し休之おきて柄杓をとり湯をほど
ける法のごとく茶を點茶筅を
出して茶碗を右手にとり揚げ左りをいらび
點茶を拵を能之く右にて點茶を客へ出
す（但茶碗を用るなり）和中を出す（但和中を出す時は茶碗を用ゐるなり）
（茶碗を載せ出す時は茶碗を用ゐるなり）
一點茶出す上座の曰く之を頂きやと
拵拵して後茶碗をもつて上座より次座漸々
と以て次座まで上座、まむるゆへ上座

を点てゝ茶碗その七載き一口喫するに
至りて腹いつぱい有之或は湯を足すべき
なれども客能く注湯を調ひなされたるを以て
茶碗より釜の口を柄杓にて掬ひ取り
據とわしらる体之を右釜の口をなしに
注ぎ柄杓を右へ寄り蓋を釜の口の上に
を掛ぎなりこれを中仕舞といふ茶碗
の底に残る湯を又柄杓にて掬ひ取りつゞけ
蓋をもなほしたる後釜の口を蓋
にのせ柄杓を右へ移し釜に掛け置なり夫より

水さしの蓋を我まへと云ふ方にうつる
（仮に湯なれば湯を水なれば水を）
なり水をもなほ柄杓にて掬ひ
取せ置なり其時茶碗に
水を釜に移すなり（仮に水をもの見通
そなれば水をもの）次に柄杓を元
のくに戻すなり尤熟の様なれ熟
茶を喫し茶碗を一隅に移し初めて山せ
盧へ返すなり尤ふきい茶ろんより少る迄
なり（是ハ破の位なり是ハ急の位なり）
一度たる茶碗を右ととり左へ移茶の点

きゝ右半ばに茶碗に湯をあけ置き
茶せんをしきゝ口へ茶せんを下に
おく角に茶碗を下に置き一流儀にて
茶を賞し茶せんを賞きる按摩にて
手柄杓にて湯を茶碗へ入杓を釜に掛そ
茶碗下に置き仕廻ひ茶せんを一ト
之陸仕廻按摩ゆうと注意を上下といふなり
り客より按摩なくハ主より一ト之ッを仕廻ふべき
按摩に乃しく次に茶せんをとりけ
たり稽古に成ハ湯をつけ茶碗

（但し湯をあけ置き茶のあけ口へなるやう）

右へ杓を下におき杓をとり水を汲茶碗へ入
杓を釜に掛け茶せんをとり茶筅をきゝして
茶せんを庭に置き次に茶巾をとり茶碗に
流水にて清めもれし方に汲水を入れ
あけ茶巾にて茶碗をきよめ茶巾を茶碗へ入
（但し棚にのせらるゝ茶碗をふきゝ陰茶巾を八角に）
命じ茶碗を下に置茶筅を仕廻和巾
をかぶきゝ茶杓をふきゝ茶碗に掛け（但し初め一度ハ和巾をもちゝ）
（はきゝて清めし茶杓のみ和巾に清めの和巾に付く）
上に掃らしゝ陰まゝ一度ふく角
い右の手にて稽の上へ杓を置き茶を掃らし

く腰よはきむ事しまより右て茶入を持右の
うへ置う〳〵次る茶うんをとり揚け左りう持
茶入と重合せ次る柄杓を元釜く入れ又
一杓すくい湯こぼし〳〵大蓋の釜へ湯を
を試る為あなれば大蓋紙をゆる故湯中をぬけ伝く風炉
まへ湯を出せを右概方の〳〵ならぬまへ杓を乾うせん為と大蓋の釜
湯を風炉へ戻る也 夫より柄杓を左りよりつけ釜へ
をなしまま杓を右手へ蓋をうけ次に水を
のうへとり来り釜へ左り城下へ右へ蓋を
を新なり

一水をしる蓋をとると注器より注茶入 注茶杓口合共

一見しくしを度よりをいふときまを出用を始、
下へ右へ柄杓を元へ戻し左へふいつ者右へ蓋を
を元へ戻しのあり一所へ杓を左へふ重
まへ茶碗を置付へ見よせ重〳〵
仰 茶碗を出を後の茶入へ百例の拭しいうと
思ふ位の茶入なれば茶碗を後へ自分へ茶碗を
を使はなを
まより客を清く居住居を中へ右へ
茶入をとり来り前へ
ふき茶入の口をを拭き蓋を和巾
を左りの立名指へ
拭客へ出を重

一見しくしを度よりをいふときまを出用を始、
下へ右へ柄杓を元へ戻し左へふいつ者右へ蓋を
を元へ戻しのあり一所へ杓を左へふ重
まへ茶碗を置付へ見よせ重〳〵
仰 茶碗を出を後の茶入へ百例の拭しいうと
思ふ位の茶入なれば茶碗を後へ自分へ茶碗を
を使はなを
まより客を清く居住居を中へ右へ
茶入をとり来り前へ
ふき茶入の口をを拭き蓋を和巾
を左りの立名指へ
拭客へ出を重

次ぎ茶托をとり左りの和巾にて七之を拭きり面に客へなるやうにして茶碗に出し和巾を腰よりたゝみ次ぎ袋を左りにとり右の掬を見せ出し一礼をなす内うつし置をとり右の掬を右の手に持ち左りの穂を持退きまた出て茶うんを右にうつし持入り次ぎ水をうつを茶碗にうつす

一客に茶器を一覽まゐらせ見終て茶碗は匙をまた掬の穂をひかへ居て茶器のうつしたりとおもふさて茶碗にをいけるなりときは客より茶器を

貴きを接拭いうを茶入を之れ〳〵倣よ我おふ
却き次ぎ茶托をとり袋のうへに横さまに載せ
左りへ移し右に茶入をおき引退くなり是より茶筅
を出さゝ都刷拭を之れ心得べし

薄茶を出す事

一小壺の形にて濃茶をたくさんなる添りて薄茶に
中次を用ゆるがまた又肩衝の形にて濃茶を立
たる添りて薄茶を用ゆるなり
右の次第茶碗小壺に拭家より見たくたるものなり中次は肩衝の
ひき家より見たくたるものなり入皆ひとしく用ゆるを以為也とそ

のことなり

一大もの濃茶よりかろくなり　棚上の所なれば水さし
おほめ茶碗と除り茶なり　極なきはもつとも多
なれば　まつ水さしを拭出し　次に茶碗
両手にて水をしぼり　茶碗を上に置　尤拭出るに
茶巾茶筅なりは　水と上に拭つ心拭なり
始末とおなじまた　座に茶巾を置　之に
かけ　茶碗を指よりかたを置
一拭ふき出すは　拭出るまわりなり
一茶をふくは和巾をぞきし　右に孫に休め左りて

茶を立二の字をふきてもまた　いもく始末拭よ
りかたを　拭たる和巾を右へとり　小拭をふく置
一茶を題るときは　右へ茶杓をとり　孫に休め左り
にて茶をとり　左に茶杓　拭なり　蓋をとり下に
とき茶は左りの孫のわきに　門に茶杓は右の孫に
休め置　茶を左りにて　拭出し　茶うん　臨まりて
後茶杓を拭出し　立て　茶を二度　三度
茶うん　入茶は孫の所に置　茶をなし　お
て茶杓なり　茶の蓋をとり　仰ぎ　我まへとなり
蓋を　茶杓は孫の所に休め置　茶を座に

一茶を出す茶托を上より茶碗の
縁をかくし次に茶碗に湯を入れ
茶を出す茶碗に水を入れ水一杯宜しき
茶碗の底にたゝ湯を注ぎ茶碗に入
茶巾にて湯を拭き少しとゝ茶を點
し客より仕廻ひ茶の接待あるまゝ門前點
茶をこしらへ釜の撰やこなうない出茶を
相上げ申しとゝ一下さんか仕廻ふとき客を
茶を撰び申したるとゝ客を
接待まるなり

風炉いろりの蓋をあらためて一杯
水さしの蓋をあらためて一杯

一客あるとき時をとゝ上座の四方にて注吸茶なるる
茶をとゝ客に茶を茶をとゝ入れ
之の湯を少し指く濃茶をとゝ茶を能く
ほどき又湯を入れとゝ點出す
一客多なる時たる上まゝ客をまんとゝ
仕上る仕廻下さるとゝ又一杯點出
まゝ客いまゝ出るいまゝ
茶釜をもつて客に茶を注ぎ
茶碗を戴き呑茶
より茶器一見を好まれい水を以て蓋して

大匙を下げ杓子を茶碗に入れ重茶碗又
水を杓子を杓入れることなり
但し他流の茶器を用ひる茶碗濃茶にてく
茶碗を習ひ作くり来候て茶杓をも浪茶
のごとくして出来なり

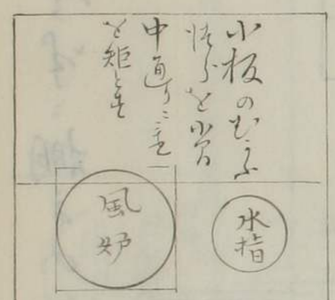
風炉のより濃茶碗より物を入れ来る仕よ
来る事なり四季共に同じ

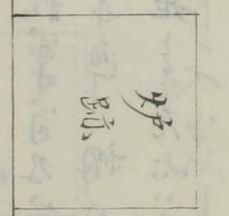
風炉に小板を矩の事

濃茶碗に釜をく撰び山炭を焚き炭よきしく
水を入れ来る茶鑵口様の物おつる
水を水を水を薪を思ふなり必ず釜撰き

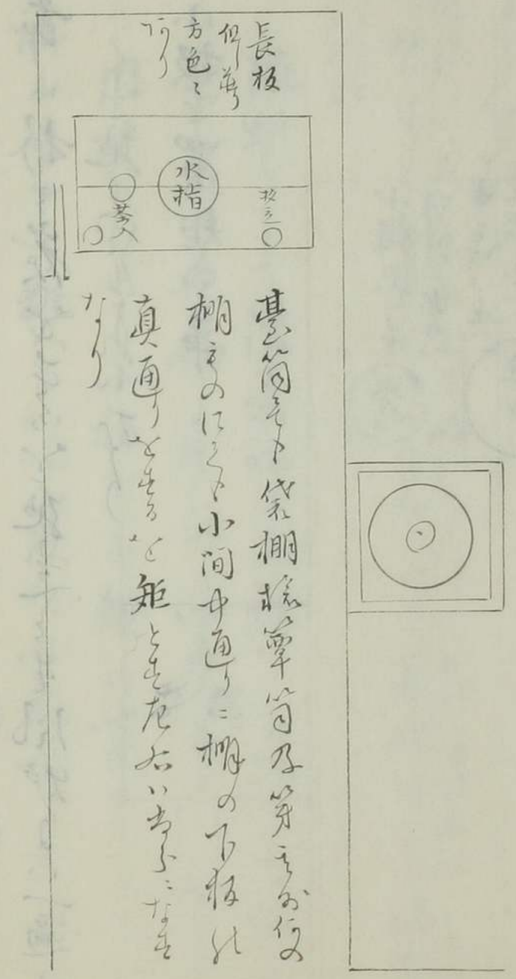
炭を入れ是非炭を焚く尤勝の炭を
炭を焚きなれいまつい撰ぶこと
炉の事い形に炭を焚くを
方を　くを地を地を風炉に一遍
なれいなり

小板を置矩の事





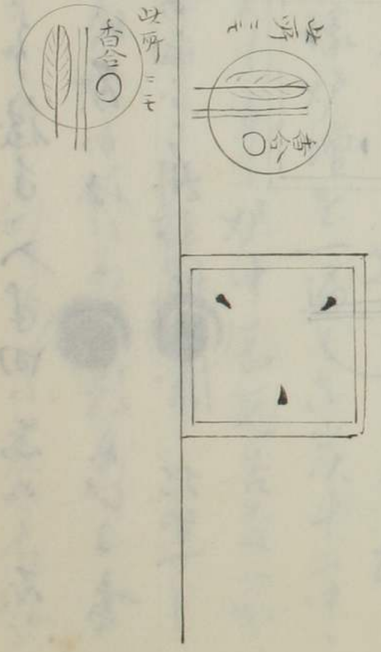
四畳半に棚をのせる矩の事



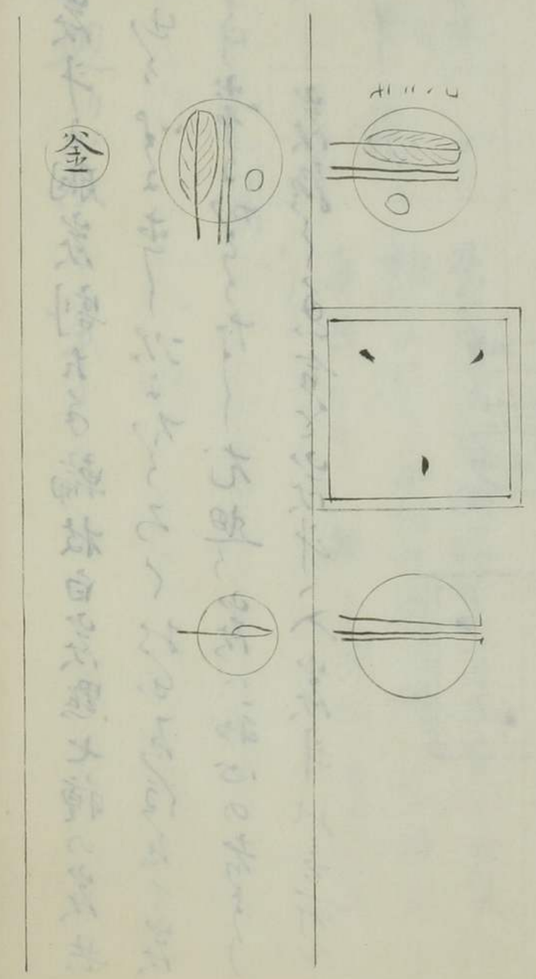
棚をのにする小間丹通りに棚の下板は
真通りをもると矩をなしたがふことなり

廻り炭の事

一はじめ炭斗に胴炭割たる輪枝白炭黒七種の炭共
いと拵出し置き次に灰をふるく拵出し置き炭
をなをす常に炭をかきなし尤廻り炭に初心の者より
いろいろ炭をくべ合を炭斗に入炭斗に置所を
かゆ事



一炭斗を壺かへ高さより後を、入ぼ田に志めり灰を
入れ巴を底元の脊にて灰の中に　めぢを書
底元も火箸を炉田の向ふ掛け　おもて



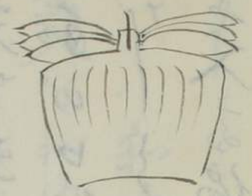
一炉田を拭出す時ハ壺を退き時ハ次の人炉前よりこく
し初の炭を一覧して後炭あけ灰掻き
廻り炭を初心の人ハ之、しく炉田の前の縁ハ左の
如くうけ

其ハ火箸をえらく黒炭よりあと掻り
よあけ炉縁炉壇を一通りき炭斗の中に
いろ火箸を元下火を主にし炉中長足吾友ハ
うろくをとり灰を主にし掻別の事もなるい
を後客から炭の仕方を人ゝの物好ハ少
して風情をうくをもらかよ　元　炭を仕廻

ふたをあけ底をうちたたき箸をもつてうく半田のさ
ゝを鍋にかけ退屈しぬくゝ初心より功者に
炭をもりないゝと一覽の上は当炭よりいきぢ
なを接打ゝ炉鍋炉壇五徳瓶を掃き魚合
をとり魚を焼き釜をうけ半田を元入し炭斗
かうろ〳〵お入り庭掃きし後うなり

長儲菓入る事

一長儲を有るい大海の内海の菓入を用いるな
ら重箱なるの菓入を用ゐる若しかゝる
結びの場を袋のおゝ心得出る様に紐の長さを



いろ〳〵重〳〵結び様に習ふべきこと
結びの解様 右の方に三ツ場ある
おうふの場に人指を掛けもうけ
上れうへ門出り重に人さしの場を
はつて切指を人指の後に紐に掛に二三ツ程出る
位にして重ねはきみまゝ両手を右に廻し
もんかうを左へなし九に人指と切指をそんか
うへ紐をふり出し左右に為なし重を後して
右の手にて人指に切指の後にまきみ両手を
紐をもきみなわふいつものゝ三指に菓入の穴

まゑ人指ゆび指ゆびかゝゑまをしるゑ面のうゑゝ
ゝのゑゝゆるめゝ後面ゑ紙をの〳〵一段ゑ
はなを角まゝいゝ向ふのかゝりをゆるめゝ方を
はなゝ面のかゝりをゆるめゝ左りをはなゝ方
ゝさゝ紙をはなゝて後左ゝ通ゝんかゝ
を向ふゝして右ゝ方左ゝうけ袋より
茶入を出ゝをかゝゝなゝ茶入を出ゝゝ袋ゑ
方面の口を内ゝ折込まゝ向ふの紙をゝりて茶
ゝなゝゝんかゝゝ紙をおゝゝ少ゝ出ゝ茶入紙を
向ふ入ゝ茶偏ゝゝ形ゝゝゝ出ゝ茶ゝ形ゝゝ指り

なゝ

一茶入を和巾にしまひ方の事

一茶入を和巾にしまひ方ハ包ミ方ハ
包ミ方ハ二ツ有ハ道具ハ合せ袋ハ紙
袋ハ一所ハ結ハ和巾ハ包ミ方ハ
一包ミ方ハ和巾の出ハ茶入を置キ方ハ角を向ふ
うけ向ふの角をまゝ方ハ左ハ角ゝ結ひ置
結ひたる形茶入袋の結ひあけにおかゝゝ方ハ
方ゝなる様ハゝゝ置角ゝ置ゝ又ハ和巾ゝ
包ミ方ハなれハ風炉の節ハ始ハ小板をふゝ

なく茶巾を載せるべし

一結のとき少うい方にて和巾包を元来り左り上に流く
ひり直し袋の紐を解ぬく前の方を二度に引却又
ちゝと解きなし人指し中指にて角を元方へ
方へと寄せけまた左をこうく左へくと寄せ
命ぶり掛りたるけまをかれしく元をむふ寄せ
おもり掛りたるを前へひろくと元へくと左へて茶
入をお四畳かと上へけ左へ和巾を前へむけ
上へつゝと引きり茶入を下へ直き和巾の角より角
を元方へのむし和巾さいきし茶入をふくなり

是よりかたりなし

和巾包重ね事

一包より茶入を同結び解きゆうい和巾包を
右へ元来り左へ人指を角へなし双指を
前へなし脇りの三指にて底をうけ中に指左へ
右へ結びを二度ときまこと解なし
右へくくりのむふむふ前へ掛りたる
間へ右の通を入れくくと左へ双指にて巻
の上の蓋を和巾上へ押へ巻を押出さるる
袋より出ぬくして和巾左へとり巻を下に直

なりきく左りの手あり和巾の角と角とをこうさいをのもつて和巾さきを拭なり（但し時の和巾の結を解き一種かうたる仕方あり之仕方い伝じの方のもつをうち左りくと右へ捻りこけいを傾解れなるなり是ぶ流出なる仕方なり尤も時の結ひ時心して主客

一茶を茶碗へ入るまいい茶杓をもて入れたる湯の茶は重を左りの手斗りにて持ら茶碗へ打ける（但茶杓なの稀なる仕方）

次より重を左りの掌に体色重く茶杓を打て重に蓋をして仕まる重の茶杓をうく茶をなしし重を載せ主客（但し茶碗へ茶杓を掛ぬか重に濃茶を口切客）

一黒茶碗をうく後左より重を一見いくつ落きし

請ふとき客位ひ少しあを請く和巾をいきしかる所ける左りて重を立来りいつもしめく茶改め其ふくを打なるうち蓋を立口を客自しして横なる和巾の上いを（図）ぬけして人指を指ゝ

ゝゝ重肌へ打こと

（図）ぬけ二指りて重に下緒を押へ陪れ指いのもつて左りを向ふへ廻しふき

茶りて後右の和巾をうく向け上へ拭て下へぬきゝり右に稀の脇ゝ（図）ぬけ茶りけ上へぬを立下へぬきゝ茶の付たる處を内へ折込重を重

の蓋をとり右指にて容器の中より一次の茶杓を出しまた和巾のつゝらおよび及び唯たゝみ物をつゝらひらく右手にまた〳〵まゝ和巾を元のまゝ右手にて茶を拂ひ獨こぼれを取り

一茶筅をとり其筅を出しいま細なる同塗筅

一筅まゝ塗たる茶筅を出し心得取しまゝ

づい土器の蓋を用ゆ取ひ風うまたる塗の茶器いしぬ物なり

袋入筅の事

一けしを右手取り左手に持ちて和巾包め

筅を同結じを解くこと一次入の紐を解くひとさゝなる筅い中にて元指ふこと中〳〵右の手を

筅を筅のこゝ添へ左手の側ら指を人指して

筅を左手にて紐を左〳〵廻しこんわうを右手にて紐

を引出し筅まゝこんわうをもふ

のゝ〳〵筅中に廻して右の方より中を元名

指を以指にて〳〵指にて元の〳〵左手に回

指にて以指にて元の〳〵筅を出しを茶入を仕方

のゝ〳〵なる筅を出し一度結ぶ和巾包の筅を

あたゝかをかわゝなる袋の内へ入の茶入の袋

ゆ回ことなり（但うりをゆるめるに一種かるうとんかるを人指と双指とを任るるい紙を解たるまてはいて）
おもふくのもてなすこと
一茶器のとき茶器番を用ゆる心は茶と記を和巾
ほそみの書の味をえらぶべし

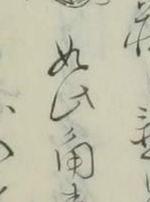
茶巾うさんりの事

一水をもて置所かるなり尤俱ふくれ木地蓋よ
りうさんれい茶巾をぬなり本地蓋なるい
まず竹をそ云をを付合て拭ふ拭いをもて
蓋のうへを茶巾載せ其上に圖のごとく茶筅を
手なりに立へ

此間
三目

かうり拭いをもひ和巾を（和巾）めしをの茶三目隔く茶
碗へ掛け置る入をいよ茶碗の中れ
仰む第たりを掛け茶碗を荘るなり茶碗の茶
をく右のをく荘り云を茶を載せ茶杓の七之を
とこ掛ぬ出左手後右手茶碗を元たりを添へ来りて下る立
高後右手茶碗を元たりを添へ来りて下る立
右の人指と双指をく茶入の袋のとんほうを摘を
元に付たりを請け右手とんほうのゆるみを

まゝ右へ拭うへ下より置て尤下より重んと
なる時たりとも可らんく常のごとくまづ
茶入の袋をはづし次に茶碗の中より
和巾を右の手を伏て指と言指とをもて摘み
茶碗の面右脇と言へ向け左りの掌に請受
是を和巾さゝまきしてかゝることなり茶筅茶
巾い入用は次第りを除かるなり
ごとく又出し和巾を茶碗へ入れ重ねて
其時い和巾を四つ折にし
茶碗の中へ入る



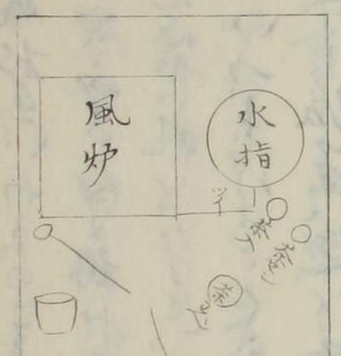
四つ折にし角を上に載
せ莊り重なり茶入を出し袋を出よ重て後茶
巾の中へ出し和巾の面の角を右へ人指と双
指にて左り左りの掌にうけ右の手をつけられ
て右より左りへ二ツよ 和巾 はのごとく打て左り手
手より茶袋の向ふよ重重し夫より擦よあり其
和巾をさいまつつふてかゝるなり右のごとく
出し和巾を茶碗の中へ入莊り重を真の手にて
又ひ和巾を貼之よ記もごとく莊り重を仲れ
手安しいふ一件茶巾かゝりい毎度れ立居を
いとひなき業なれい手若なる人なでい遠意なる

屋きてなりそで

一ひしを多爲

四畳半に席に風炉をまうふの隅に莊る時のまたい隅炉の砌に常のごとく座敷ふときい岩をうゝろに清く茶を點るふになるにしてこれをく座敷ふこと能て其に起りい山科の如喜尾の二畳敷隅炉にてなせる點おなり是流儀におゝく家伝とまる所なれい他言ないめまる宮易に其點おいえをぎるこなり他流よい是を如喜尾點と唱ふるゝ

一藪内元祖剣仲紹智庵間て風炉の茶を點をゝ時水をゝおつゝを小板のおとひゝくゝ出ゝ容に才ゝ云つゝを立ゝれるゝ居士見ゝ是おあ茶ゝに成年ゝとなるめさりゝいゝ如喜尾そのひしを多爲いけ後のてか



初め莊り杓水指の茶つゝと小板の茶つゝと並ゝ茶かさり重なり座敷なゝりて客をう〻後ゝ清る杓なる時なるゝ云つみゝ座敷なり

きて茶碗打出いつものごとく茶入と亜合せ扱ふべき事
出掛打と云ふ事は掛けて後開けることなり
点前客へ礼をなす
一次は茶入を出へ
茶入をいつものごとく扱ひ水指の蓋開け所
礼をなす
一扱茶巾を元出し亜を畳んで茶入
もどうとせず亜角に其儘いつもなすべき事
なり常は置炉風炉を莊るゆへ風炉を引出
し蓋目は莊るゆへ元つみて点前ふまおよばざる
なり故に莊るときは元はなきに点前ふべし
一隅炉の節ひは客へ点前点を定ることなり四畳半

の隅に風炉を莊り亜に時点前ふとかうなれい
略して記さるなり
一濃茶薄茶は引續き薄茶点前の事
茶事薄茶は引續き薄茶を点ることは流儀なき
なれど他流のくせを招きたるに成時は客より
半懐用事ありて早く帰り度をいひ其好を
ある時は止なくいふ扱なるべし
亜ことこのり
茶事を点方といふ濃茶一を通り点て客へ出
せばいこりなり茶を点出をい上座へ扱け

喫して二客三客と廻るの途上庭曰海ゆうりと
住職家をもて請度参らんとおりは慶無穆用の住
庭まで参れしに御ありはこれをもて御ふるく
失礼なかに早く帰庵致い迫は苦労な
ふ汁擂き住職家をもて下されはは別して恐
参らんとは由とふ主言ゆうりは住職をもて
しは度毎に変故念の為りに住はもう無穆住
用事と承りはていたみ御留まり難はしば
事相住職をもて上りとしひと家族に返るを
待つなり

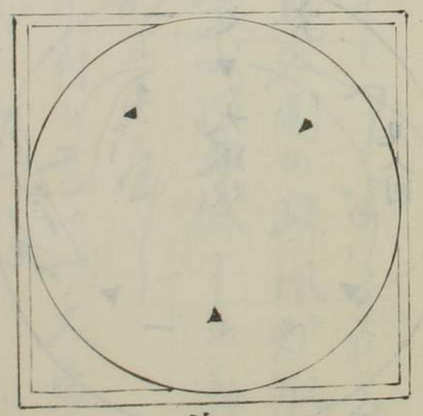
さて家に帰り返り湯を入れ客たのもいは苦労
なから家族家をもて下さるとふ主者はい
もべしと言へ湯をけり

炉の灰并五徳置様之事

一灰は四隅を切り蛤貝の如く肉置まして、かゝのけ置申し委しくは源流茶話の茶具問答は内をえく心得べし

一灰は高さは日表を言くるく日裏は少しつゝ低くすべし是習ひなり

一五徳の据様は三ツ爪の内金爪を真の爪といふ上座へ向ませ申べし是を客爪といふ高さは



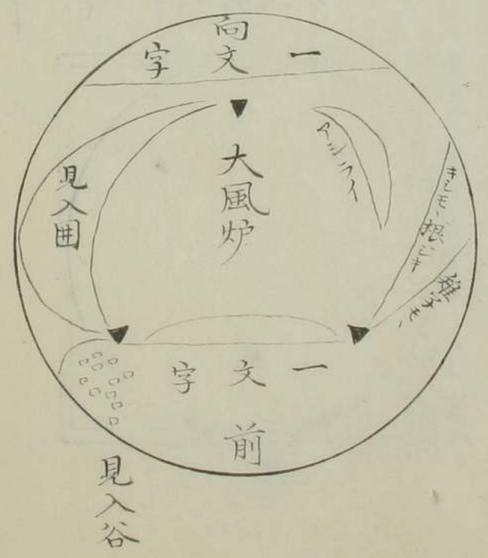
前

釜は高低よ適ひ柄杓を釜ゟ掛試こゝ杓の柄と
炉縁との間五分ほどあくをよしとす

風炉の灰并五徳置板こゝ事

一前の一文字い上を低くと
立つべし左りは五徳は
半こゝ右は五徳はか面
を留りよ也

一向の一文字い前と遠ひ
上を低くと高ゟ及ぶべ
只うき上けおくまぢなり



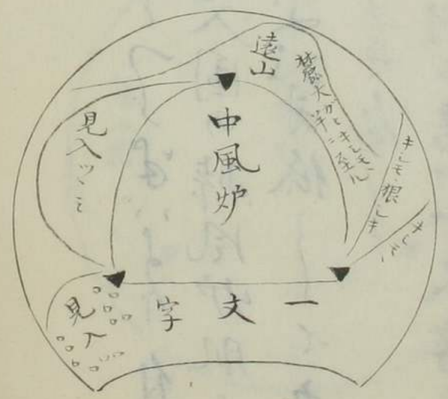
尤高きい前ゟ同し

一見入谷見入囲こゝ五はそこつはべよりは付ゟ
なり高サ一文字に同し尤見入囲の峠風炉肌ゟ
付くまよりは向ふ低ゟ低くして五
徳きこゝい有ゟか無きかよ也

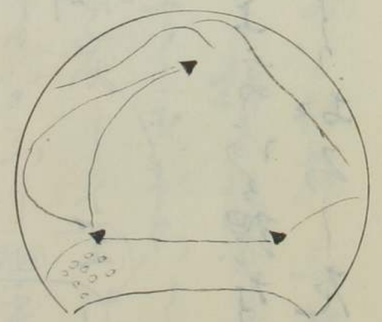
一雑子段こゝ五徳は向ふ角より付ゟ高サ一文字ゟ
なり尤風炉肌ゟ五分次第ゟ二三分ほど高
くこゝ上い一文字のこゝ低くと高ゟ
両後ゟ内と付る

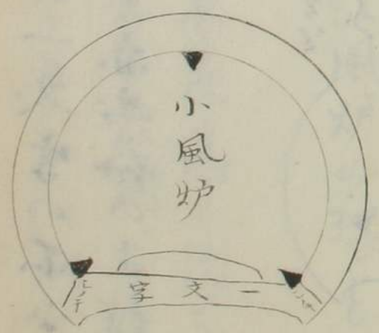
一向ふゟ高サ一寸程形い時ゟ適ひ柄杓数多ゟ

一五徳い少し宮なり故に底に付変ある
ものもあり五徳の羊より外面に面るべし
一五徳に言い釜に言低く造ひケキリニテモ
ハヲチニテモ其有変を風炉に言サとひとし
きもの
一中風炉い向ふを遠山よりなり
を除い大風炉よりなり
尤遠山の景い時に景色
あるもの



一遠山の模様い五徳の右を峠として
峠となりて峰を二つ
なるせんとするもの一つなるあと
ハ根にそなるを立其形となり
ものを時に風情なるべし
一小風炉い懐せまきいかきいのげ
なるもの
一肩のいる金風炉い大小ありて押
まるいかきいの底なるもの
一弦暑の弔倒をけを用いる

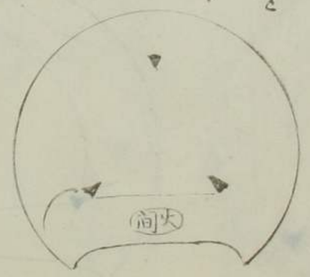




ときい大中小の風炉 㐂 の一文字の形より
山と形を取りて波し亜なり亦土器の上縁
亜なれい所をなぞへ

如此山の形を
なす亜なり

一かづき風炉を少を
切りぬきそこらぶ
こなり
次間の切れ口を
そて上より下へ一匙押
亜く二度下目より下
より元亜



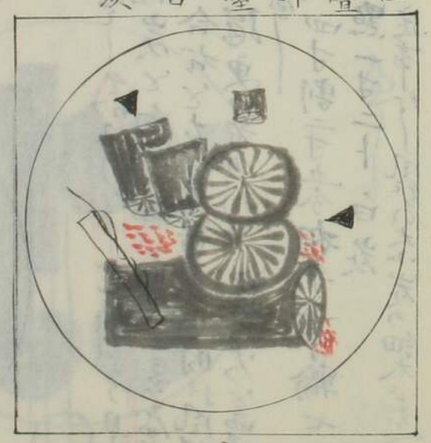
一鬼風炉の環い釜と上げ引つけ亜上亜のの環なり
い六度りそおろも亜しおろし松右りおろし左り

をおろも亜し後より炭をおこを仕舞三ツ
りて風炉の口并より肩ものの口まても掃く後左り
上げ次より右をあぐる亜 環を上く亜おろし
亜ものもおろし亜たる環を炭して上げ
亜まく揚げ亜たる環と炭しをろし亜
なぞもを亜 環付の釜なは風炉の環と
見合ぬ中ようにもを亜
一火間をきりこぐりをけ炭灰悪く掃て
後ち灰ほう沢くの一ツ穴を立り火間をり
たる沢よかをけのようこれを掃き五ちと爪を

掃き風炉の内肌もきれ雲もこ
しくはきて一方四を取るろく炭を置
一かるけい折くまりを用ひ中暑い中から
け大暑い中からけ二枚かわらけ暑い例
かるけを用いくるくい源流茶法の系
奥問答の内のケ條を見て心得為
圍炉裏炭置様寸法
一胴炭　二割　三相手　四輪
五枝　六白炭　七點

一此圖い定法と顕を迫なる
或い輪を一ツ二ツ点を二ツ
用ゆるもあり輪を
割るきふもあり點を
置所い炭の粒子を使ひ
て右ゝたるを重ねる

四畳半墨目炭

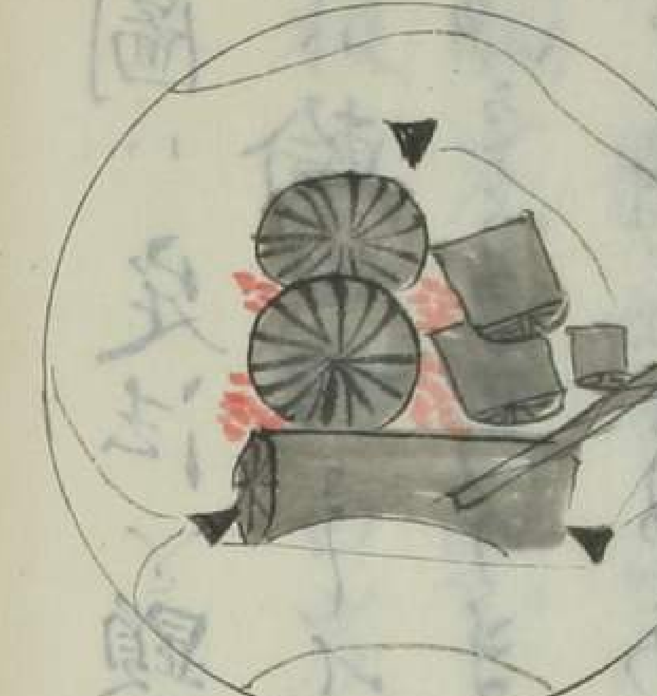


前

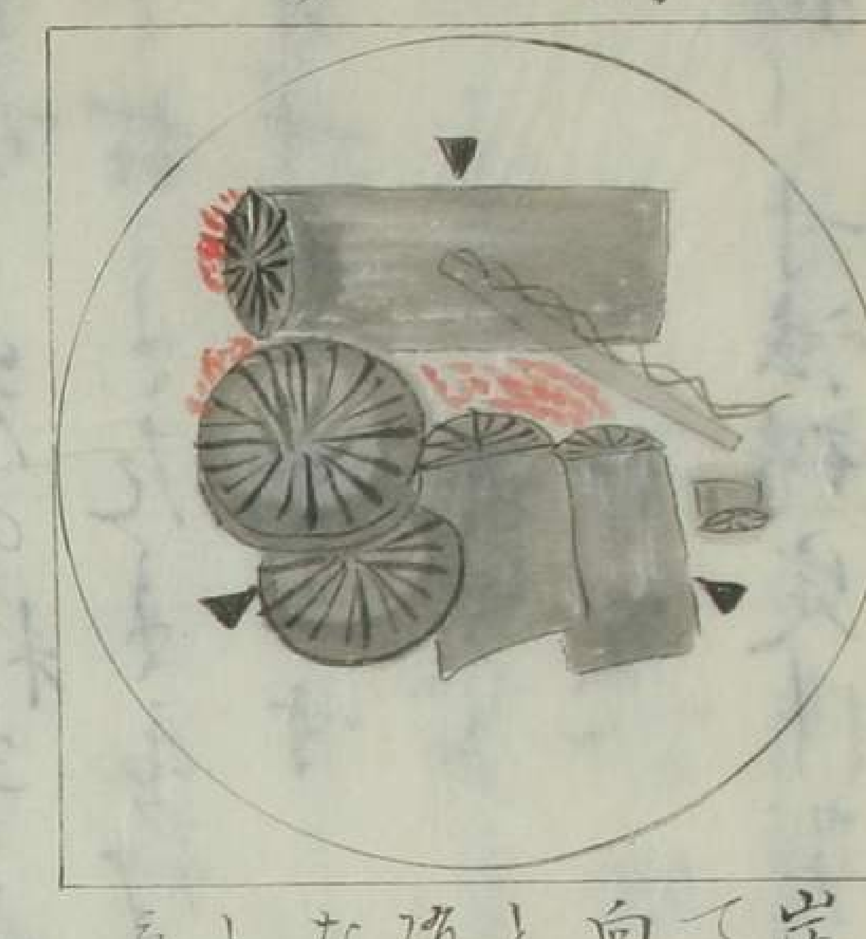
一炭寸法　胴五寸　割三寸
輪七八分　枝四寸
白炭　相手二寸五分
點一寸五分

但寸法確定しかた大きい短細きい長く切るが如し

一 風炉炭置様之事

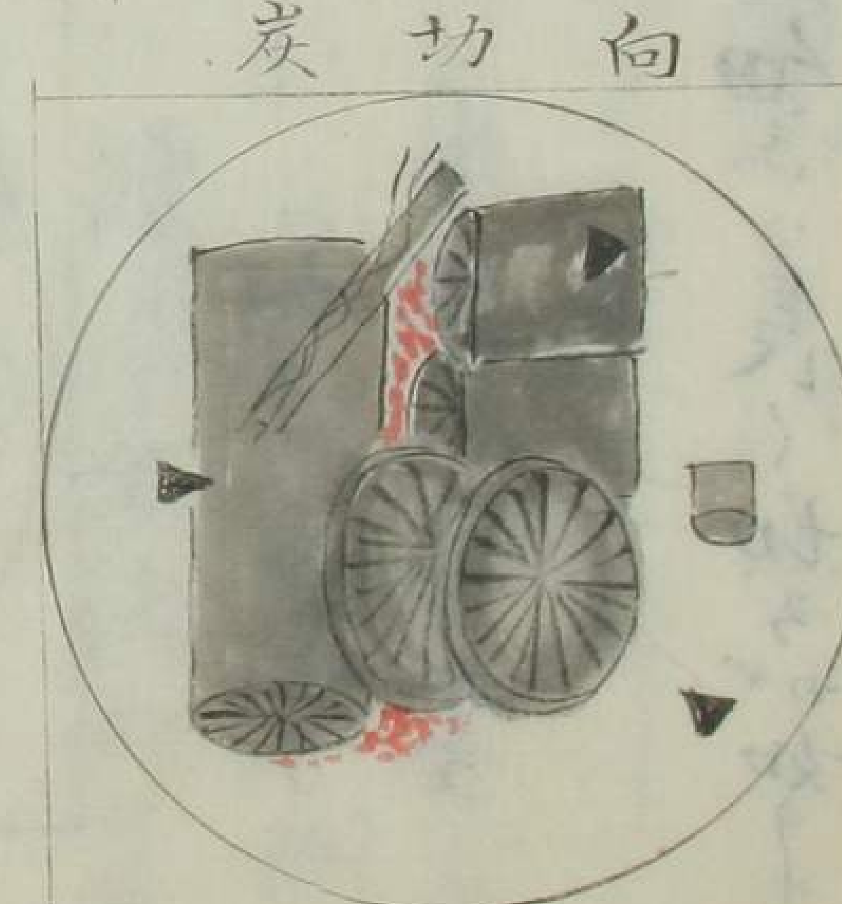


隅炉



炭の仕様客を交
て置なれハ隅炉
向切の置方五
しの客爪よ
随て取替なる
なり四畳半
とハくとも客を
立て替なし

向切炭



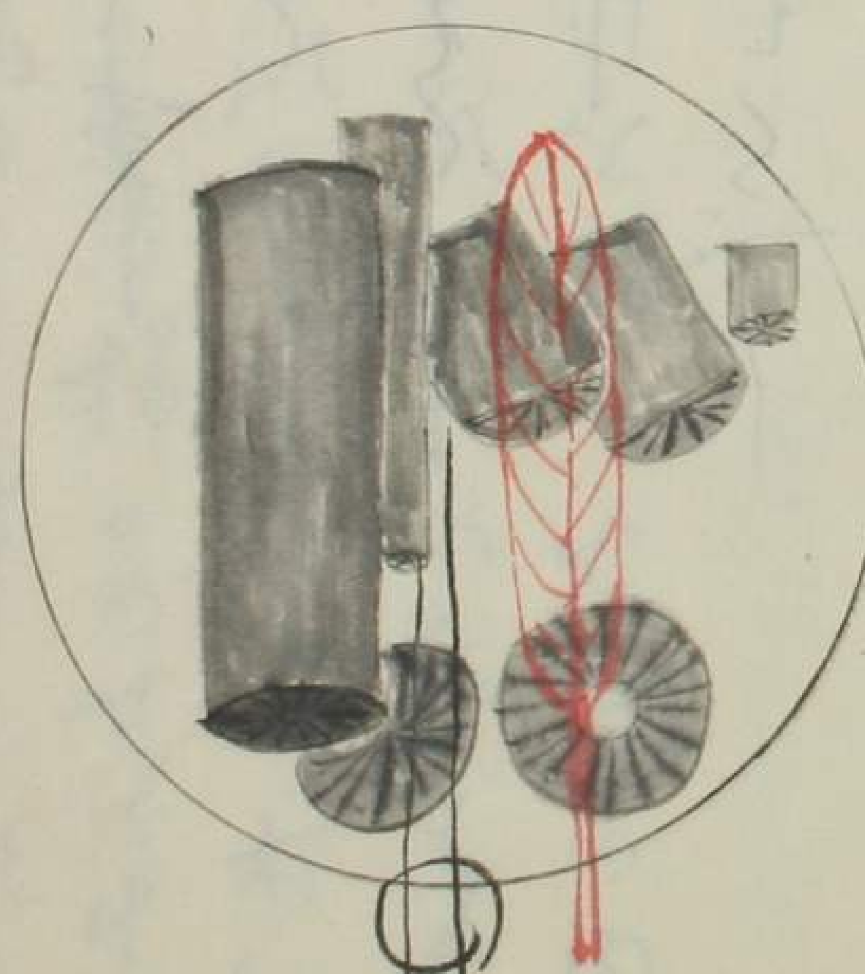
前

炉の炭よそしてかさりなし尤前より見る炭
なる故よ輪炭を向ふへあへ向きせ候へし
炉の炭見合右を左に入替るも時は風情よ
随ふべし殊更旱暑の折ハ客へ火を覆ふ
心得あるべし
炭寸法 胴四寸割二寸五分 相手二寸 輪七ト
枝三寸五ト 點一寸二ト 白炭
右寸法も定事なし風炉の大小炭の細太による
べし

一 炭手前ハ肩かきの風炉よ限るべし

炭斗ニ炭組合之圖

一 輪炭二ツ前よ置き輪炭掛て
枝炭を置其上ニ胴炭を置
そのうしろよ重てわり炭を置
其脇よ點炭を置山炭斗の
むかふよ寄て白炭を置し
炭ハ輪炭を一ツ健ふんと
をもふ事是非一ツ入置べし
其風情よ用ゆべし



點を二ツ入置
胴炭二ツ割の置様ハ右左枩

ろくろ有兒角炉の底ろくろ付く胴を入る事
一糸合い塗物の新い炭斗入る焼物いかろ敷く
入れ出すくろ
炉縁と拭板掃板と事
一拭板い口めしまかるくるめくる
掃板い口めしまかるくるめくる
炉壇ぎき板と事
一炉壇い口めしまかる返しまるくる
五徳ぎき板の事
一五ろくい二三めしまる角に向切い三二と掃隅炉

は二三と掃なり拭板い一ツ爪ろくり其次第かろ
なり
風炉掃ゆうれ事
一炭の灰一ツ掃ろくけを掃き火間の内
ろくはき風炉肌并五ろく爪ろくに三めしまる
まる三ツ掃ろくて肩を以の字ろくこと左ろくり右ろを
掃きまるこを右ろくこと左ろくろき掃ぎせを出
中ろくて向ふ掃入る角に小風炉并肩ある風炉
は炭多ぎなけまい一ツ掃を用ゆるゆるもぎ
同ぬき板の事

立ちはい……めは其下の紙をふく下の字は心を用
ひて風炉肌は拭はい和巾にて右の方を二度
まで左りまて左の方を一度ふき和巾を二つ
右まて揚を打口を右左りとふく角〳〵左鉄風
炉ふきはの事

一炭の法りまてい　小板

めは右左りまて一面まてふくべし
左左りまい一扁まてふく時い　小板　めはもしめい
茶碗打出かりまして
まてふきまて二度目い手ふく角〳〵茶
の茶巾をまんとて拭まわ拭き角〳〵

左り勝手い左りに茶巾を畳けい左りをふくべし

釜は事

一三徳線耳ごと永手約釜は仕付は環い釜は湯
立ちまて後い環ひかまてきはゆ
和巾まてあしらふ角〳〵まづ右は環をふき
をひく沈まて左のをひく角〳〵其和巾
の形　右　左　めは右は星は雲を立り沈は左
りの角〳〵の雲を取〳〵環をあてるなりまて已
大なる釜い和巾まてい扁かまて左今一ツ懐中
〳〵二つまてひらべ〳〵釜をかけく後い環を下へ

さけて釜をかけ

一羽釜い 透木を用ひ大釜いかき炉まを四方釜い
国炉裏の隅ぬりまいしまるなり

一手元釜 あらぬいもとより口を釣ある物な
しいを客付して掛重なりはずめ蓋重を敵を
引くまりまを向ふ おろし置ぐ 亦仕廻
ふときも蓋をきを敵を閉る後手を起重なり
まを釣ふを用ゆるなり甚きまいまれらぬい
なく唯口を客付して付おろしまるなり
炉まり釜を似る物ふ底を足三ある有長を

朝鮮釜 ふ

一釣釜 さりあらぬい左りの臂を膝の外に
当るを刀物を人指を高指
りてをうをもみ釜を上げ右をかぎ
を上げ中まより釜を出しおきく
右まを釣を右を環を釜をはずし時
付右のうの釣をまづ沈を左をはづつ
釜を左を重ねて尤向切なをそ墨口を
通ひまを切りあらい便宜をうふを杉を重をを
うまより環をまづ沈を炉をもうひくを

置まゝ上、程なく茶碗を盆に
炭取りて香を焚、香器を客の
くまを程なく下げ亜く釜をもうし鈎を
うけ釜をうし果て鈎掛よりけ亜まづ釜ゐを
元納めまづ始めの如く左りの膝を膝の内
より尚鈎をとりて持右手かきとまづし釜
を下けかきを無角し炉縁をふくまま左り
のうしい鈎かきいりうしふれば右手くい拭うふれば
和巾を左手より持てふく角し拭ふく右手持替へ
角ふり右のうしふくなり左角ふい鈎

よさわりて左りの角よりふきかるふれい中
程より右へふきうさしまま後ふをり茶
碗うし置まづ炉より向ひ水し釜をけ火氣ち茶
かゝ一是つり釜はあらねなりまい茶碗
を持出ぞる茶より三ツ程を持出釜を火氣ちうく
水しをけ三ツ程うして炭縁を掃三ツ程を持入
ゑ中ふうけ柄杓を釜うけたるときい杓の柄を
押へ心うして釜をふを角へ一是まふを
置釜はあらいなり柄杓を釜に掛亜よいをと
輪口は釜をを縁ゐ掛け亜一まま杓の柄

よ壺中次ぎに蓋掛けぬがよしさうふるれば
い壺い扱の柄の内の方中次いおのうちと心得て
くさり自在にもはり釜い湯返しにて釜は
縁ようけていい永出さぬなり

一自在もくさりふ一体のうちことなりさりながら
小猿の加之良を客月にて扱ふべきもの置を
平なれい左りにて釜鈎をあげ改を左へなし
右にて小猿を出ふべし向切りよい右にて釜
鈎をあけ居て左にて小猿をはうべし向切
よい右にて釜鈎をうけ居て左にて小猿を出ふ

ふをきてまた鍵を炉縁にとき〳〵のべし
し左客に炉縁にてより添ひをうぬ方に出べ
きれい四畳半なるい左の方へのべ亜向切り
なるい是に炉縁の向ひ左にようのべ亜
がらいづれ鍵をのべをうまを納ろうに右の手で
うりて扱ふ左にきまいのべを時い小猿の除
を扱居て延しやり納ろよい鍵の除を扱て祖を
く納む左にて除かるるなり
一唐口に釜い湯返しせぬなり永来湯返しい
湯に程をえん為なれい唐口い湯返しせをよ

絞之ゆれいなりたる柄物はあらかじめ扨を乾
かせん為湯返しまるなり右はてき大蓋四角を
まるとも隅角をつゝ亜をとをしを向切隅炉な
どい水をしゝ炉の間もふのうゝよ亜まるゝ丸太
蓋い中仕舞の節四角を角目などして扨ふ
亜をかりまるを亜ゝし大ふゝい和巾の
扨ひよ心得ありふいしゝくい和巾の変よ紀亜ゝ
一釜のふゝいの五枝ふい先向をつゝげゝく湯氣をぬきあ
ゝ時よ手をあげゝ釜ゝ口ゝて亜をきりふを
きゝ載せ亜ゝ

一柄扨を掛ふゝいうゝ口い縁よかけ縁口をおゝ
ゝ掛ゝ釜いきゝ縁ゝかゝなり
一風炉釜い大なるよい下ゝの孫を立ゝ脇を
載せ釜をとり釜あゝ亜をゝ孫を亜ゝ
小釜いそれよ及いぞ

環の事

一環を釜ゝ掛ゝるよい右いまゝゝ左りいむふ掛
ゝなりてづきいをのづゝ右いむふ左りい
あゝとゝ角ゝとゝ無るきけづきを亜付ゝ
きを角ゝ

一炭斗置い二ツ重ねく水次を置よさそうなぬ
方より口を客付てして置べし
一火箸へ掛るに是又ついい口を客付てして掛置べし
炭斗あに（二寸）めさしてけかけ寸向後な
りまし炭斗りれ摸様ようり（二寸）めさ縁か
むろ、森させく掛置そやう掛まづ手
を作むけ扱ふ事
一両合環渡法くうん仕付の環なるを心得あり
習ふ事もろ〳〵
但ある合い酒釜より上けく元合く
又五とく居ても用ゆゆる古とも
いふ渡ちい渡
酒釜い用ゆる環なり

炭斗の事

一風炉よさい籠煙よふく〳〵さる〳〵〳〵炭斗い
冬時よ用ゆ但ふく〳〵炉
炉すかきれとも茅籠い風炉な
ともきふなり
一拵ちいさい籠ぬく〳〵の数手なき炭斗いあ手
とも横ちい〳〵やゆびをふちよかく〳〵ちを布麻
とふ置りて拵出屋
一手付の炭斗い右ち手を拵左りを下よ添〳〵手
なりふ〳〵て拵出ふ置ちを用二月かど
節遠〳〵〳〵置べし

釜鋪の事

一吉野杉原紙を四折にして懐中にまゝ釜鋪紙
とゝ備中に松山因幡の鳥取より出るものあり
是ハ一折にて懐中にいつも
懐中を用ゆ釜鋪紙いづれ二形
ゝ釜をなれい釜を揚げ後ハ
ゝ釜を出ゝなり其事なり出き
時など油中のふ中に出ぬ
ゝてあるハ今一形の紙を出ゝ
中へ入用ゆ紙の事ハ柿いろなる
も用ゆ

一釜鋪紙なきハ小杉原紙七枚なども堅ゝ二つ
横ゝ懐中して用ゆ
を右ゝ四ゝを左ゝ向ハなる柿ゝ
一組もの釜敷ハ炭斗入れ出ゝ
ゝ左ゝをつらい裏かゝ
ゝ其ゝ返ゝ

火箸の事

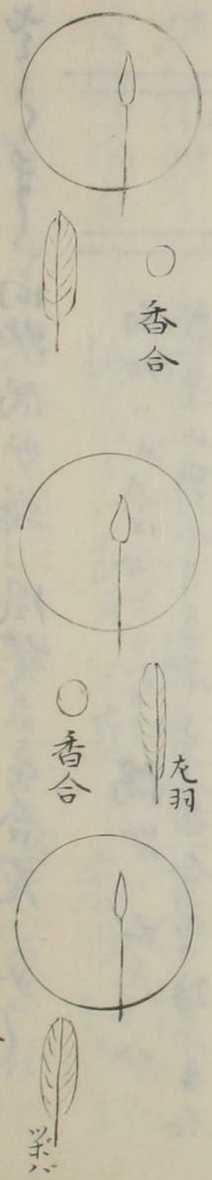
一炉ハ柄風炉ハ金の代衣火ゝ
ハ唐ものあり是を炉ゝ
入用ゆ炭斗ハ炉風炉ゝ

かくされい苦しからまい棄柄を風炉の内ゆ
ろいくるくるかくぎ柄あるを火箸よりおそれなれい
なり

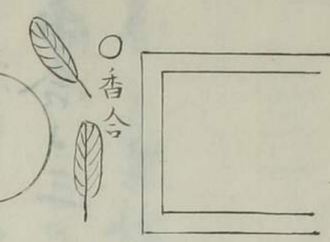
香合の事

一備前ものなどいつれもやき物に香合い
大うろくの中反さぐの上ゆ　めいの也形出
くもくもくも推朱まろい青貝梨子地高蒔繪など塗
物のまい炭斗へ入れ出角しぬ物やきものも
棚ゆも降り重なり
一棚ゆ荘りやうい重位の香合か名物のふなら
ば

棚ゆ和巾をしき香合斗かざる其次い和巾なし
ゆ荘る其次香合を重ゆして三つ羽を添く荘る
其次い真をろりて香合を三つ羽をかさろなり
由緒ある香合か客ゆ到来かまろい時の風情
ゆ荘ろしかを撰ひ出ひしのやうとも荘ろ
一香合ゆ三つ羽置合せ柄い右羽左羽つぶ羽ゆて
遠ゆ其柄子左ゆこ



さてまた向切炉隅炉并に風炉に香合左の如し



向切いめ香合なり隅炉は右左り炉と炭斗の所かはるまでにて香合三ツ脚の香合せるかるなり風炉は角にけこと如しとも賢にあり

一香合三ツ脚棚にある時とも松に釜に環をかけ釜をとり其釜を上げ其かたり下に三ツ脚をとり其まま香合おき香合を置おき其三ツ脚

また炉縁を掃きて座をとり又香合を左りまた三ツ脚を炉と炭斗の間にかりおき夫より香合を置き其三ツ脚を元炉縁を掃き

一香を焼んとする時香合の元松に右に元左の掌にのせ蓋をとり右の膝の上に置て炭にて囲炉裏に炭焚ものを炭に火箸にて炭を

于焚ものを白檀の丸を炭に入れて苦しからず風炉は炉風炉とも三炭たるべし客香合一見を請いて前繪深付など繪あるは出すべし扨右に右に元左の掌にのせ右を

添て扨入屋し

三ッ羽の事

一拝領品は三ッ羽斗も荘る容より外来の品なれど
は三ッ羽を重ねて香合を添て荘りて香合に
荘りを見合せ心得居べし

一置合柱は香合の座を記す炉のもき柱ふちの掃き
柱なる祀を道具屋の掃柱は大中小と凡て成柱
青海浪のごとく席破急と付く掃て茶點口
の内岩の目の届く変まで掃かゝる

一ッ羽の事

一一ッ羽は灰形ある奈良風炉を限りなり灰ほうろく
上右の方より　　ぬ此の心持出居て主所は炮烙
を風炉の前へ置る時山灰斗の次を主へ掃寄は
前へ寄せて火窓の内と五徳形と風炉の内を
掃居し

灰かゝろくの事

一かゝろくは出柱は右の手斗りに常は下間通
より扨ゆ右へ寄せて扨左りは前を高く出居て
尤基目横勝を左なれば送り出して席に
横掃ゆゝ左より扨出入をなること

一置所ハ四畳半臺目ハ炭斗の次ニ主隅炉向切
なるべしかり主ハ釜を一付主ハ後炭斗の前ニ主き
かゝるなり後ニ釜を掛る釜ハ次ニ主かゝる釜
を掛るなり風炉ハ角ばるべし隅炉向切なるハ元
掛ると同ジ心得なり

水次の事

一薬罐ハ次ハ口ハ掛けかゝけ蓋ハふくさきを人指
と双指ハ打除の指を薬罐の口ニ掛おきて
口ハふくさを掛ル帛ハ蓋の上ハのせ釜ハ次ハ
中ハ水ハ一ハ主ハ

ふきんハ釜ハふくさ蓋ハ載せふゝ巾を
薬罐の口ハ添ハ釜ハ水を足を面ハ水を足をハ
ハ出入ハ兎角口を客付ハ扱ハ
一片口小口ハ蓋を打おきハ布巾
を釜の蓋ハのせ主ハ片口ハふくさを入り仰もけ
下ハ主其上ハ釜ハふくさのせ主ハ其外ハ
薬罐ハ次ハ水ハ尤おかるとき口を客付ハ
なるハ打ハ廻ハ右尤りの打ハ
ハ上ハ客ハ口ハ打ハ元ハ

ふゝの事

一 絹羅水さしの口方、面てゝはゞび毋ゆ
口茶鐘などに添へ釜へ水をうしまき釜をふき
ぬい中くでり拭ある後へ釜を逆ひ出ふ拭出
茶と略居の茶をふきぬい名物ハ茶ハれを床
に飾る時花生を元つるふきんを拭出花生の下
のうに尚くえまでゝ拭入なり拭てく初座後
座ふゝ帛紗の中ゝ拭居てゝしのなれいも
陽のなどこゞ毋もたる時出してとゝやのうち
りえるゞゝまるゝゝ後いたゞ毋ゝ中へ入るゝ

志ゆ呈ぶぶい釜茶紙を出してゝ志めきゝ釜
兒角志のそゞゝふくい茶ゝ茶ゝ茶ゝ
一さゞき拭いゝくふゝ帛ゝ茶ゝ茶ゝ
茶巾のさゞき拭ゝ同ゝく角の照ゝ茶ゝ
をゝりさゞき毋ゝ茶ゝ茶ゝ
一茶をふくゝ兒肩をいの字ゝ左ゝ右を
ふきまゝりゝ右ゝふきゝ
火氣のうゝ毋ゝ茶ゝ
を左ゝ右ゝ一文字ゝふき留ゝ五ゝ
の爪をふゝをゝ拭ゝ

さべし

手燭ゝゝ事

一源流茶話の茶具問答の中に手燭いさもゝ
ゝゝ灯盞の縁なし夜會ゝ炭を置て茶を煎
ゝる事用ひ中は炭のとき短中のかゝるゝ
久上座の炭一覽よりまゝきゝる處を見合置茶
の時に手燭ゝ記のゝ方ゝ置ゝ定所なし
茶碗ゝ茶を入ゝ茶ゝ搦かんをゝゝゝ者あに
風炉ゝ釜と水をゝゝの間ゝ置炉ゝ意目四
畳半ゝゝ中柱の有ゝ所ゝゝをゝゝ

置ゝ大板茶碗の内ゝ吹ゝ茶を吹ゝ
古ゝ教ゝゝ其板ゝ口のきらかなるゝ尚恐
心得ゝゝゝ記ゝゝ初ゝ手燭を拭出ゝ
は茶點口ゝ古河ゝ茶を拭出ゝかゝる座ゝ猛
ゝゝ手燭をゝゝ出ゝもゝ
手に拭出ゝゝ
一會席のゝゝ拭茶座ゝ短冊の吹ゝ屈きかゝる時
なゝゝ手燭を出ゝ意ゝ
一炭手ゝおゝりゝ手燭を茶口ゝちかゝゝゝゝゝ
客意合を一覽ゝゝゝ手燭ゝゝゝ

下さるべしとそれにたんを吐きすてるべ
どいふてなり主人もしそれを辺炭火を猶多く
取入る燭をたんを云くせしかく度
一炭屋多所屋合一覧しに辺を時多燭となるべく
主なり主人燭も元入る時多燭い元もを
呼ばしに下さるべしと一應屋内も一見いたし
度なるべしかきしもるなる炉の事い會席あるを
燭を請ひ中立ち以ても少つ庭の内を打一覧して
起てなり

ふくさの事

一色い紫ゆかぎる尤莊り和巾まそ色かそうも苦
しかもそ黄かぞ茶なるべしまい織ものもを
くるるかもそ紅い牡丹の人い遠意あるべし
一客の懐中ふくさい色かうそ織ものそ苦
かもそ主人由緒ある品出せしまなる入用の事也
一和巾を腰まきむまい袴と二つ目のえぶいはきも
略衣なるい古くびの縫目よそきも屋女常の
上ばはきもなり
一土風炉をふくまい和巾さいきしに茶市をにて
右をふく時風炉ゆ當るまるなる成たる丈けを

開らけく始め座に着き左の方に立膝おなし様にして
左りをつきまし扨て茶巾を右手にて茶をふく
座に和巾なりたる方を扨て茶巾を
といふ小板をふくを茶巾を右手にて
一柄ふ和巾を莊り重ねい出し和巾を懷中して
出て座に坐し柄を重たりとも後客をうもどり
立納りて懷中まで略せば出でふくさを
さむき方を扨たる方を客の右にして出
客より返さるいむきを立移返さる
一出し和巾を茶碗に添重ね一重を上へ二重を客
へして出さへ客より返さるい一重を上へ二
重を主へして返さる茶碗に其形和巾を付へきなり
一馬上盆いえり茶碗に添ぬなり
なるねば出し和巾を
一唐口を蓋して蓋重の座を大ふくを載せる
るい柄杓を立左りへうつる時右りて和巾を左らぎ
左りを着和巾を摩みなかりて柄杓指りて掌に
巾へ左り迄置て柄杓を立右りて主の座を
かへ重右りて和巾の端をとり引まいつもて
く膝の上りて摩み大蓋を取ふ重り載せる

水さしの事

一から物金の類にて南蛮抱桶などい能く切り拔出し能く拭き拔出すとい〻ときは金物故なりとのつゝかくれをふき出すなり偽ものゝ能きい伊賀なゝの水をゝいぬもの〻ゝかけ出すべし塗ふるい水を入れる目入水の出るぬ様ふべし蓋を裏表とも拭切る事べし但し塗物に水をせぬ物なれい真の手桶などい熱湯を沸き切る事ふなりとも蓋い密に切れも塗ふるい密をきらぬなり

一水さしは拔様い如しら指を横ゝ當餅の指を下へして掌に付ぬ様よ拔べし

一蓋の云様い為り云べしき世ゝ出ふ為べし

一ゆふは重宝い水さしの横ゝ平水をゝい命ふ棚ゝの様い柱ゝ或い屏ゝを立かけ重なり

一藥鑵ゝ水さしゝきふり口を密有こして尤り立ゝ多を拔右を口の下ゝ流ゝ拔出屋ゝ出ふ立ゝ立ゝ〻多をもふ様ふせ尤りゝ多有のふゝに當て右をゝ〻尤りゝ〻黒茶をいり蓋をなきゝ多をおこゝ重屋ゝ尤多有

ぐらしあるきい其まゝ起かたゝ左ゝのゝ上、
引あげ下へおし付金ゝ〳〵さまれば起て居るもの
なりおゝ入るきゝうらゝ〳〵ゆうりさまよ右左おし
かゝ口を岩付〳〵しておゝ入なり

一平水をしゝ上よ扨ふる金荘るをゝ〳〵くゝ
〳〵ふるよ記を

一其ゝ手桶いゝ手を横〳〵して和中ゝ手を左り
りゝ扨右を持〳〵おしるなり蓋ゝ元紙い右こゝ
蓋の方をあけ方ゝ元来り中ゝ左りをゝ
ゝ〳〵蓋の方ゝ水をゝの手もふの

方よのせ金ゝ

一足をゝ〳〵如此蓋をもふ扨せをなり

如此蓋を扨をゝをなり

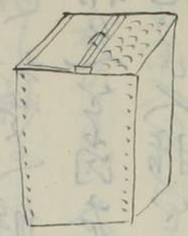
一廣口水をゝい水指ゝ縁ゝ柄杓掛ゝ元金をるゝと
いふゝ條ゝ上りゝ水をゝ汲んゝまる時金よ掛ゝ
なりよ合を伏ゝ扨ゝ水をゝの方ゝ縁よもよゝ
うゝ手のを汲むゝ仰もゝ汲来るなり

一約瓶ゝをゝいふまんゝを手ゝくゝ方ゝ通ゝ常
の場ゝを扨ゝたゝ所ゝを左ゝゝ方ゝ五ゝかゝど

みぢかく成て壺の口に成りさゝえ
くり方より通りあるふきんの中を拭指にかけ
て下へ拭まげ手の際まで来るとまぎり左り
を手をしの下の方より流へ拭出て壺をゝ
ゆるく振拭まげ拭ふきんをゆるめ両指
を拭て左りを之左り壺右に拭を元へ
右へ引出三ツ成とも四ツ成とも是をみ元へ
其手にて水をしぼり右の横を拭いまゝの如くふく
拭ひまゝ左へ拭へ左りの横をふき又右へとして
手を拭てふきんを拭へなり蓋のとり柄を右を

取いんとをは右れ指をもふかと立ふかと
手を出して手をこゝ手をつけ目をして
片手を引出して手を流へ廻る時左りを流へ水を
しの拭て流左りまゝ左りのふきに上へのたる
時流へ手を放し片手をうて蓋の上よの七壺ゝ
とかくぬれたる物ゆへ引出をうて載るを程
つ上目をして拭ふ左りをふきを右に
蓋をとるを仕形よりなり右左りかるこなり
蓋をなを時を元時の仕形同なり黒ゝをとりて
水をしを拭入るふきんなれい右四指を水を

のむこうの方なるのて左りい双指を置くして脇に
四指を水きりに左り様に高く拡げなり
一新瓶水きりいそこびるなれい茶入い棚に荘り
そくべしきもこび茶碗拭出かり重し茶入を棚に
そうしあきりにあるを出いそうくをき茶碗を元場
茶入を重合を角し道幸なるにく茶入茶碗を
道幸に内に入るい右と左りに両袖を拭水を
のあるに真うして重を荘り付くを
一風炉の薪始めに小板をふくるのをを置く出
に小板をふく角し棚に茶入荘りいるい茶入



を出うし重く小板を脇に置く角
右のふくを元たの器なり蓋を
きせるを元たる時はきくしてもと戻
そべしいれ瓶水をいはこびるあと
一曲るの水をいい蓋をもうふ拭せ重なり
一兵口いに口を容付くして重蓋をそうていに口と縁と裁
水口を拭拭にかふだけ四重角
茶入に事
一初め荘り重うて茶入を右まて元茶我あて左りを
流下に重べ尤早く左りを左まう拭けべふを

早く法れいかく物こゝ孫ちゝしくてまつかくを
きく茶入を下よ立くゝ左りそそゝ右よ双指と人
指と拇ひのおよび組を二段よ引ゝ人指よ脊よ
ゐなをむふゝ押ゝ重よ人指と双指の先とよなよ
角を双左りと出ゝむ第一もいよ引出ゝ言指を上の
方より組よかけ右と出ゝ引五指とよ一もいよよべ
下ゝおをゝ解段をゝ引ゝ夫より茶入の穏よあるよ
指先を両左りゝ二段よまいりとんほうを右なし
左りの人指をとんかりの下ゝ廻ゝ双指よかりを押
右の人指と双指とをとんかりを双結かどり引出あよ

の人指と双指ゝくもゝふのかゝを立ゝ陰の三指
いゝ茶入のもふ當右右左ゝくろけまゝり三指を屈
て右のよ人指と双指よおよかりを立ゝよ左りよ
同指よゝかりをとふゝ左右とくろけまゝ
ふおよゝくよよ指を茶入よ腰よ當右ゝ廻ゝ
とんかりをもふゝなゝ左りゝ袋の双よ体あ右よ茶
入をゝりあけ左りよ双指をおゝ人指をもふゝ陰よ
三指よ底を詰袋の右を引下け四指をものゝ中ゝ
言指と人指を茶入肌のもふゝ双指をおゝ袋よ中
ゝ入茶入を立左りゝ双指をおゝ陰指をもふゝよ

袋に茶入を入れ口をぬくとき袋横になると茶入は
おのづと下におちる也袋の口茶入の
肩に添て結て茶入を下に置て袋に左り
方をなして両手にて袋と行義を正し其席に
袋を置どころ袋のいとばは
左に記す

一座敷の中程に茶入袋掛の釘を打て掛
申す袋の口を前の方に上へ少し
袋の表を上へして口を出し方へして置
釘に掛る方を打る釘
掛申す棚に置て上棚の左りの方に角を
出し置て亦夜會に用る故
棚へ上ぬなり唐物の類盆類棚に上る
なり棚なきときは別に台あり此に略す

一袋を置る事夫より和巾をかぶせ右に
けの釘あり此に掛る左夜會に影さま
故に掛けさるなり又釘のなき所に炉に
のまゝ風炉に用る次に置しいつれも
袋の表を上へして口を出し方へして置
釘に掛る方に表裏なきなり
棚に置て上棚の左りの方に角を
出し置て亦夜會に用る故
棚へ上ぬなり唐物の類盆類棚に上る
なり棚なきときは別に台あり此に略す

一袋を置る事夫より和巾をかぶせ右に

就て左たりて茶入を左手より中して二の字なる
其手を茶入のもとふの肩へ和巾を双指にて當て
脇の指をはなせば和巾茶入の向ふ脇に一ちい
ちなしい和巾の上より掌をうけ居く左りは
双指を曲へ人指を曲ふして茶入の
底の上へ指をかけ脇のゆびして底をうけ居く
茶入蓋へ客付へなる様に右の和巾を茶入を
そへく右の方へなをす曲ふ也り二ツ折なる
人指と双指を折くひしとひしくと曲み
なりに五指にて折茶入へ左りは脇に指を

一茶を點ずるまもりに茶杓を左手より右の脇の双に
付て左りにて茶入を元来茶杓の手にて蓋を元
茶杓へ右は擦に付て付て茶入たりは擦より
杓出し茶碗へ臨まし茶入へ茶杓を
て茶を入屋しくと茶をしくと入終りて茶杓
を茶碗のふちに掛て茶入のふちをなし
左りのまへ社つまを屋し
一茶入を客へ出す時は右にて取手より左りを添居て
ひ少し客を請く茶入を下へ出へぜんのごとく
ふまへ蓋を元茶入を左りは脇に付て右の

手に和巾を畳みたる様にして口をもうふくを置
ふき蓋をして和巾を畳たる上に名指を指と
よはきみ指を茶入に指客へ出す事
一茶入ふくさ茶杓入の景を捻じ置きも
か本法なりいつも袋より時さを置して入る
なり客へ出すまさにさを客自ら出すなりさしも
水さしの前へ出すにさを横にして客付なる様
茶杓を掛たる時さを切る様に捻なく横なす
なりなり
一茶茶入を見るよい之蓋を取ると見る所いか
なるい蓋をしなどう見る時い蓋前へあやまつて
まつびなどして炉中へ落んことを恐れなりなり
ま蓋を見る時いロを手を置て見る所尤手
を近く才を退き見るべしかなるを揚げ見
るべきなり
一耳附あるひしを手がめ新しい茶を茶碗へ入る事
耳まいを手をもふなるべし入る所
一水滴茶入い　　ぬきロを客付して茶碗へ茶杓
袋より出し柱かうなる掛るなり

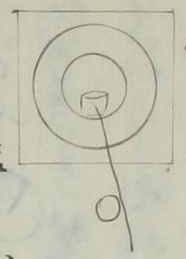
掛板い和巾をぬきして茶のうへ蓋をふき次ま
ふくをもとふくこのうへ茶入を廻まてなく事ま
下へふきおろしさまま左手の手にて茶入を右に
廻し口を向ふへなれ右れ双指を添して和巾
うへ口の下へもけこれをふき常のうへ底れ
方へふきかけ底を拭て座に置手前茶入を
客へ出しはてき拭巾右へかへりなし
茶を入て時を口を向ふなし人指を口れ下へ当
双指を添れ下へ当て茶を立出なり茶ふ事を時い
もとのうへ口を横にして立置

重中次の事

一重い和巾をぬきして右の手にてつけたりて
つゝを左へふくさを
指を立指の腹にけ
上へのせ
さばきまきり蓋を
好ふとして後
らおくいうみを出
左へうへ茶を重ね
但重い茶の入ゆう

腹れ茶を人
指を双指にて
拭ひ右へ廻ふ
廻れ一文字ゆのみ
腹れ右の和巾をたり
ふくさい右の膝へ休め重
右の膝へ休め重
腹一文字ゆのみ

ろを過ぎて[illegible]を立てるなり之を[illegible]
苦しかるを蓋を取るまいおよりし実をろうは
命ずるを蓋の立変炉の時い



器のうしく柄杓の柄の内り掛るなり
又中次い柄の外すかくるなり風炉
のときい膝の前を立きるなから炉の時ハ格好ハ
ひ立角しく棗のふき紙前を拭いもくふきなり
なり棗い小壺ハ拭ふ拭ふいへ縁を立きるしいへ
もし拭ひ終りるいしく拭なり之の二の字にふ
きてもくるしかるぞ中次い肩衝の拭ふより見立

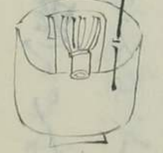
られい小壺い肩衝より棗い中次より棗きり
り取袋をうけ濃茶をうり黒られハ中次い薄茶
器のみのうり取袋い掛ぬなりさて棗ハ茶い
一文字中次い板形ようきるい形ようを合ようしく
なりと源流茶法ようを見たり
一茶杓を載せるうり棗ぬいもうふより之をうして
載せ中次を直ようして一度ハ載るなり
一中次い二の字ようしく茶い形ようはき立で
蓋を立見るようをよぶぞ後蓋を立る時角ふ拭を
二ヶかくしく前ようぶるとしふるなり蓋保き

ゆへ上、揚ることを多きなるを記をめく掛物と
掛のあ、わるい自然の事なり

茶碗の事

一茶碗の中もかぶり付添き茶碗い茶巾の穂
まみを多、なし茶筅の穂を中へ入束を多へ
なし茶碗の縁をかくるを清き茶碗い茶巾
のつまみをもふなし茶筅の穂を多へ掛くべし

平茶碗い茶筌ノ束ノ前ニテ茶巾ヲ一ツ見ル茶筌ノ穂ヲ茶碗ノ縁ニ一見ル



筒茶碗い茶筌ノ穂先ニテ茶巾ヲ一ツ見ル茶筌ノ束ヲ茶碗ノ前縁ニテ一ツ掛ル

一茶筅のもしへ入るにい人指と双指とを束をこるべし

筒茶碗と茶筅だ第川出しを元ノ通へ入るを
茶筅だけ多ゆ隠まして入る通へ
一茶筅打い筒茶碗ん茶碗ん平茶碗い上れ而
ぐ多へ
一拭板い平茶碗ん茶を切りて茶巾を之を多に
かけ掛をもりて直よりふ、掛け茶碗を上け
茶を清ゆ出れまして縁を三遍ほふき茶巾を
縁を折中入ゆの字を大き書めくしい茶巾を
入を右りて下よ重ね一筒茶碗い茶を切り
之中をつまいをもゆ縁をふき其まま縁を掛け

茶巾の上より拭まぜ茶巾のあしをおろす

置釜

一湯あがをさばくあるにそいさぎよくさいがふ

近ぼうぬ柄上より沸釜をたらし釋れば

湯氣を汲ぬやうにして茶碗をこぶるもどし

又ふり茶、おかし右へうつさべし

稽茶うんの事

一稽茶碗といふい調ヨこの茶碗の井戸こまがおう大き

なる茶うんかまい秘蔵の茶碗なるい論をかれ

茶碗ゑ稽へて出ふといふかく拭たとへで初めこの

を出し汲ゑ唐ものを出ふときい初めの意を出ふ

なれで心得くせぬのゑ出ふ名器そ

幸ふれ秘蔵の茶碗なるい出ふうんぞして

一應返事ごくいはまきてさとしたし

ゑ出ふぎそえの所へ出してゑまゑ出常れ

ゑ出ふやはいゑれなるい常にそ濃茶碗

茶ゑ用ゆ茶碗を用ゆ

茶釜の事

一古へゑ子ゆゑて切ゑ始めゑれを利休改ゆゑ子ゆを

上て指ゑの子ゆといふれい出ゑ子ゆゑを上へい指を

あけぬやうにせねばならぬ

一茶種数種も扨の茶せんあるべし種いろく
数種のうちにも扨の茶碗を用ひ茶筌
の大小茶碗に應ずべし

一茶せんふりい三ツまたはけ〻之湯を入らるべ
をまるときいまはうえ来茶碗へ入おいよせたり
を茶碗に添まづいの字と書くほうとかへ
扨ひしゆるくと八九遍まぜふれば茶筌ぬ
せんを少し揺ぶりあげ茶をたゝし上あげ
さまふ茶、迫色の付ぬうちんほどふりそそ

一茶碗の縁をそぎを三遍まぜ但遍一遍に上、
あけぬる色を付たるとてぬぐひ茶碗筌
ぬぐひ〻まゝいの字を出 ㊀ 器のそこにつゝひ茶
茶付〻ぬぐ〻尤縁のあるりまゝしさぎ能門に
茶をたゝしまるゆるくとふまぜ
一濃茶を點る時之湯を少し入る湯茶の下の方
ゆくり茶溶くなり扨れを茶筌にてとくと
たゝき茶せんをたりのあるあけ茶をまぜ茶
うんのたりの方より扨を茶かまぜ茶
いとえいの字を書く心にさらくと點 ㊁ 器

はしらの字二てほかゝ書終りまいゆの字を書
て上へぬゝ角ゝ尤茶ふんの縁一ふりかゝ終をい
しきりゝねきゝ出ぬとなりし まゝゆるゝと唱ふ
まゝ屋ゝ

一仕ふまゝ抹茶筅の芽のゝ方なる穂まゝ屋ゝ
芽なきい糸の方の穂の穂の方ゝ
一茶筅まゝぎい是茶碗ふたりを持ずいの字を
書さらゝゝまゝぎ茶筅打二度ゝてなをまゝぎ
て◎のゝゝて茶ぬくゝ茶ゝ
抹茶せんまゝゝに回ゝ

茶杓の事

一茶碗ゝ掛ゝまいゝ七之ゝ伏ゝ茶杓ゝきい仰ま
けゝ御の上ゝ方ゝ尤ゝ方ゝ引ゝ
心持ゝて和巾ゝ通ゝ廻ゝあんゝ拭当
ゝ七之ゝ
後ゝ二度なり
一ゝ茶三度拭ゝて茶杓を和巾のゝ
ゝ下ゝ方ゝ打合一度七之ゝ拭ひ茶杓
の切筒を和巾の上ゝ拭ゝ節ゝ
入ゝ掛ゝ角ゝ角ゝ上ゝ角を解ゝ

一扨かゝる二指を双指にして切目の中へ上を抜く指を
其上の蓋に掛て抜かゝる時いくらか出るまゝ指の先にて
一蓋をなでまわし蓋板へ出たる重箱にて
七之の横にてなでまわし七之の背にて押まわし
一蓋をなでまわして後の蓋板を取かへ蓋板の縁に
下隠にて折切目あれば元にあらずして蓋へ
はめ七之のごとく掛置
一蓋への蓋をもとめりの蓋板をもとんと掛
置いまだ器物をもとの方へ隠に掛置てもよろしき

蓋へを嵌ふ事をよろしきけり安られい器物を
掛置もよろしく
一蓋板を仕廻ふ時に二度ふきて乾かりたはべめ
一度ふき和巾をもとる蓋付ならば和巾を
右へ抜添こなしの上へ抜出すべの外へ出ぬ様
蓋をたゝみて抜ひきて和巾をもとる蓋板へ掛置
一度ふき七之を拭ふ蓋板へ掛置
一客一人を清ふきい和巾にて拭あたため七之を
あかし切目を蓋して法のごとく出置
一毎日の蓋板きれい由緒ある蓋板へ掛上げ出

和巾の上より荘りやすきまゝ概なく或は
夜會なとの時下より荘る時い水をもて並べ荘
り並べ〳〵ぬ茶托かぶりある時いかゝるもの
接托ともいふ面鋪を下者座の名稱ゆう
と考えいろ〳〵ほなとこゝろのなり
茶て茶碗托皿ゆり並べ合せ茶托
と云茶碗を掛ものゝ又稱ゆう茶托ふ
時立茶てゝ茶ゝ荘る並べ茶托ふ
常茶のいらるゝがとゝ茶ふ稱のとなく
ゝ茶器一覽を清ふ時唐物點の格を云

代を定出ゝ上のせ出ゝ
茶托もゝ姿 中 ものゝ
中 ものゝ

茶巾の事

一さい巾七寸の茶巾ふ四にをゝき五寸ゝ茶巾
ゝ三ゝさいく〳〵尤大小い茶碗の大小ゝ
四ゝきゝ〳〵時い茶巾ゝ折ゝ三ゝふ
折二重の方ゝ茶ゝ拭ふ面ゝ三ゝをいく時
ゝまつもふゝ出ゝ次ゝ手茶を拭ゝ尤ふ
ゝ隙計ゝ出ゝの上ゝぬゝにゝ勿論湯の出

方を中へさゞくゝし尚さゞき拍子をあくまりて川辺
ゝ夫より左りを左りを下はけ人指し高指ゝそはきみ右の
手をひけ出手を左りを放し双指ゝそ中を云四折
ゝなるなり隠し手数のうらをぬをゝ
一寒中はあらいを中ぶるのかるゝを云ぼり茶巾
をまるるゝかりを云ぼり茶巾をぬぶして子細な
角と角をゝれ川辺一ゝ夫より二ゝ夫角の方を
少しをしゝを云ぼりを云ぼりを
茶筅入を茶せんをうじをなして後茶巾を云こ
ぼりの上をを云ぼり角をゝをみをを云川辺角の

角をとりて敷をれし三ゝ夫より四ゝ夫成をたゝみ
をれゝ茶碗をゝ茶碗をゝ云あけ是ゝかゝ
りなし
一茶筅の茶巾ハ□是のをゝ是の所を云川のむ
ゝ夫ゝ夫ゝ夫

ぜいもつて風炉板杓子身方をそぎくつるまる
ものぶぜいを用ゐ杓子のうらをつるを風炉専用
とゐ杓子を選びなし

一同日深夜に蓋物を板杓子等拵しるとゐ條は
白物隅炉と炉と水をしるの間に蓋を板杓子等
杓子の合をうつもけて蓋を杓子を掛板をいあれ方へ
川辺まいのの若は花を拵る杓子の板を一番風
炉の砌も杓子を出すを拵用一事なる

一杓子合を出付して稀通り杓子出を蓋を
を右に云ふ杓子を出ぬき云時は右ふり川辺心

杓子して片手斗りせぬものなり川辺なぞ
之蓋を孫の汲を優く杓を孫り休めまり
蓋を表裏を之京れあり而を出付ふなる拵ふ
して出す事杓を掛を

一杓の掛拵ふ合を直して載せくるを
下げ方指り小指を拵ふくをつる杓ふまでし
蓋之杓を掛ふ拵を
除ふ拵油のをしをれい見を程卒まれ一
番の位定りしをふる

一釜へ掛拵合を伏る掛け五指を述へ板の之の

方にて下より立て立ての通りに立指さしの通りに上
より立て〻〻尤湯口の釜い合と中おろして掛け
うぢ口い鍋すかく沼釜い都縁よりかくなり
一湯水の沒板い伏る釜へ入る時い泡出音のてきそ
ぶ〻されば合を横より湯を注つ〻入れい音を
て〻〻水を沒ると同一事なり尤湯い煮立くなる
上よりの理なれい下を拵杓をつき込下を沒ぶべし
水いかこと下に居つ〻の理なれい水上を沒むを
口込べし湯ゆとも沒なる時い合をひきく抜べし
一茶碗、湯ゆともあり板い茶碗のあの方少したり

〻を抜いまを〻〻なき時ことぶも安し
器の量の寸を当るべし湯ゆとうけたる
時い合をてふとゆとを石沼沒べし
一湯返して〻〻杓を釜より出し釜に上りて
寸一寸宜ゆをさかいよ合れもうふを釜に縁に掛
ゆを下げ下へまいし立直して〻〻陰
口に釜なとして湯返して世ぬ時い杓をもよ及を
ゆを〻〻〻〻うつを沒
一茶碗口に内して伏よ掛杓をたり〻〻客に客に方へ
う沒ゆ〻〻ぬ板いを蓋を及を乗に内ゆ

[illegible]り之を杓に加へ杓を左の蓋を右に
辺を重ね口をとめて後杓を左の蓋を右に
黙おけ方、まるみこぼしをくるくるとなり

一風炉柄杓の扱ひ方、神後に元にて中なる柄杓
に人指を柄の上へなるなりてをを伏る直なる
神後の時に右の手に柄杓を元にて左の手にて
柄をもいまし[illegible]双指の後を柄の間にかぬ
[illegible]ふ言指と人指の間に柄をのせ[illegible]つめると釜に
口を柄の後付と一緒なる柄をもべし[illegible]心おい[illegible]を
柄腹を付る心なり取る[illegible]勿論[illegible]さし辺べし

指に[illegible]たるがよきなりさてもまた後の後
か或に黙おかるなどして戒なる黙時なべい
撰様をかへ言しかるべきに[illegible]ものを切べしなる
[illegible]切柄杓に杓の合を釜のもとの縁ようけ
杓を杓たるを釜の後を斗[illegible]一[illegible]まを面[illegible]
なるをひしく双指を柄の下なる釜に[illegible]縁
[illegible]柄の[illegible]すなるまるなる[illegible]ついをまなる柄を

蓋置の事

一蓋置は[illegible]おかるい釜の蓋の載る[illegible]近付ぬやうに
方を[illegible]故に竹[illegible]下を[illegible]はじめ

掬取を抜出先にて抜をぬき又右にて蓋を拵
こなたへ別に時抜の掬なりに別にて孫の叫らを
もきをもつはふ出
一竹柄の手おきい客あり切り掬なりふききい釜大
小ありて井とよふきき丈け長く細き短くきるがら
細きを短くせれい先に九寸を定りのれい先を
ふい寸法きりて部に逆井をぶ
子中い少器なるにて二ツ三ツ突あり中宗炉
なるにい吉井の竹柄を用るがら井柄いぬ
して先ものなれい掬ふい茶ぬなり

一五徳手置い炉ふ風炉ふ五徳を先ふきい
先ふ角ふ丸徳ふ長いもの奈良の石燈籠
の油次を載たる具なり故に三ツ足ふ云掬もの
きい一ツ爪をもつぶして柄を下して茶を
黒器の手柄を上なり一ツ爪を表して下に茶を
一三人唐子い羽織を客自まを
一鱸の手長い双ふきみあり庭を客自して茶ふ
一さざれ手長いうつもの柄を茶自
双を客付して先ふ黒あり中仰むけ
右三人唐子鱸さざれの形を夜学ふいるれい油を

載せ皐の上なる文を学びたる器なれいなるまゝ唐
金土の類にて作りたるなり
一下に敷く唐木にて文様の具なるを多くかきに用
ゆるなり学びるゝ棚にして下を客つもけ其子にて
書を起して板を掛るなり
一布や香炉い真の敷く代りに長絹をかるゝ
敷ふる色い生物の表なる用い概きのそい表多も
板袋柳を用ゆを海るい用ひぞ悪仕生は道具は
行へるゝてい生ぬきれなり

系れ事

一新い系を五月葉系壷に詰置十月まるり口切るを
古来の式法なり故に十月寒炉るい新系なるにより
陽れ和るなるをるるなれい水をまぞに黒系
まるなり水をさせで活くなれ理なるれば風炉系
そい古系なる故系を黒るおに系一切をして系を
黒るなり水をきれ湯をあくし系の寒をしを
補ふのるるなり
一風炉の砌りまる系師なるより新系を計来し
試る黒系に水をきぞに黒るなり
是を新古のなり水をぞ黒系せぞ風炉の事を

て茶碗と心得茶あるよりも接待もてなすもの
なり。茶を早く點ずるをいまだいせぬとも
白湯のうたまりあるなどに湯を注ぎて
茶は呑抹の事
一亭主茶筅を出をば上座いろまづ臣をおあがる
まぶきやうに接待おもてなし茶をすんぬをまた
立ちて茶碗を取り上げ其上にて茶を戴きて茶を
色を見香をきき一口呑み息を服ほく時ふ主
服合を問ふ客よく其調のひたるを答ふ客

茶碗の形はよりも甚丸はなきい呑方は茶碗
ところとあるべきれば心得く呑屋まる人数の
二口半を都合三口ものうち右の茶を
呑口を拭ひ懐中の紙あるひは右手を
向ひ和中の向きを出しぶと云ふ上座に
向ひ茶を茶碗和中をを立ちこの世上座
拭ひるべきれば右の手を袴を清屋上座
下をを和なで接待おもてなし臣茶
茶は呑抹上座よりもとうなり主座まで
和中は茶碗のさめ

たゝ愛うて茶を呑もの茶碗を右手下に
和巾を上に敷き直させ給へ　上座より三度直さ
せ給へ　唐物は茶入まゝに帰り付は茶杓
などは和巾入用のとき中上座は懐中ふく
かきとき茶碗の付出たる和巾を直さぬ間をて
ゝ茶を下座まで茶廻り右仕舞たらば上客
は茶碗をかへさせ　上座より接拶して後香
とき茶碗を見るべし次に接拶して
見るを未だまでかへるなり未座より茶碗を
上座へ直させ給へ　上客より直さぬ　三度茶

うんを又出す　茶たらい一碗程をなして上座
より茶碗の接拶に及ぶ
一座の茶いまゝ呑まれい我のみならず我より直
さぬ　座の茶い客より接拶なれば我は
黙るゆへ上座心得て一服まみたらば三度茶う
陽を入れとき注ぎ多あるも注心をく直上り直仕廻
下さるべしなど接拶まるゆへ　釜は焼し置り
なるい勿論なり　焼ぎい三度ゝ一炭いるゝ中ゝ
しと　ゝ　ゝ　ゝ　客人数多
の中などい上は心得て吸茶なされ下さるべし

といふがゝ吸茶碗に濃茶をよく湯を二度ゝ
入人数を通じ終り點てしめべし

手前を替る事

一茶を出し置く柄杓を出す水を一杓釜へ
たゝ柄杓を預け釜の蓋をとり蓋
置よかけ水をしめしふたをしめこがを杓後へ入
るゝ替りを出るをもこがを杓出居住居はき
杓をとり たゝく預け和巾を釜の蓋をとりふく置てのせ
杓を取とり釜の口をふきけ亜角にふきしの水
入用の事なるべし

是ニ由リテ国家ノ萬端後見任義